
宮崎大学農学部獣医学科 獣医病理学研究室

山口良二先生
退職記念誌

Retirement memory book for Yamaguchi sensei

令和4年3月

目次

定年退職挨拶	1
教授略歴	10
研究業績	12
研究室沿革	33
学部生名簿	41
大学院生名簿	43
寄稿文	44
写真集	66
編集後記	93

挨拶と所感：定年退職に当たって



まず、退職に当たって、コロナ禍と言う非通常事態で退職を迎えたのは私ばかりではない。私は宮崎大学の教員（助手、助教授、准教授、教授、特別教授）と厚生省国立公衆衛生員研究員（厚生技官）の公務員一筋で、他の職に着いたことはない。しかし、なぜ研究と教育一筋だったのか考えてみるが、当然のことと思いつつも明確ではない。幼少期からじっとしていられない性分で、勉強ともそれほど縁がなく、宿題もせず、外でばかり遊んで、周りに学び得る環境もそれほどなく学ぶということは考えたことがなかったかもしれない。小学生時代からは泳ぎと魚採りが好きでほんとに野生児だった。しかし、かすかに覚えているのは幸せだな、平和だな、これが日本の状況だな、と言うことを、面倒みていた妹の手を引いて道を歩きながらそのように思想し、感じ取ったものであった。金銭的に裕福でもなかったし、両親も共稼ぎで、両親が家に常時いたわけでもない。それは慌ただしい今の時代と違う。それがなぜ、大学の教授になったのか少し考えてみたい。

通常の教授たちが残す言葉と少し違うことを記載するのはこれもいいだろうと思う。私は特別の存在でもなく、特別な人間でもない。時代に沿ってある時期から努力したし、せざるを得なかった状況にあったのだと思う。

令和3年3月31日定年退職、昔で言う退官である。しかし、私の教授籍が大学の方針による定員削減の対象となり、巡り合わせで籍がなくなる。病理学教室の運営は残った教員1人では運営できない。他大学では同講義数で教員数は2-3人である。そういうわけで一年特別教授として病理学研究室に残った。65歳定年は、この年になってみるとまだやれる気もするが、駆け足の人生だったので、もう休んだ方がいいと身も心も悲鳴をあげそうであった。8時から夕方5時の勤務ではなく、大学生後半からとまることなく夜も昼も境界なく働くことも多かった。現在、働き方改革と言いながら、今の環境では病理はかなり厳しい。学生との対話は職業柄やるしかないが、時間は費やすが楽しく感じることも多く、教育の喜びというのがある。少し、私の今に至った過程を記載させて頂きたい。

獣医系の大学に入学した時点では、例に漏れずおぼろげに臨床獣医師になるためであろうと頭にはあったが、獣医師の職業が単なる動物を治療する獣医師だけではなく広範囲な職があるとわかったのは入学してからである。今の学生さんより情報が少なかったかもしれない。入学後、最も活動的に見えた病理学研究室に入って形態学の面白さは多少あったが、参考になる本はないし、コンピューター等インターネットはないし、コピーも青刷りで、電話も共用であった。だから、情報は使用する教科書と先生と友人たちであったが、ほとんど教科書からの情報以外は実験データ、すなわち病理学だと解剖や組織診断だけであったと言っても過言ではなかった。しかも、小動物の開業も困難であり一般獣医師でも就職難であって自分の好きな道というのもどれだけあったか不明である。私ももう少し新しいことを

したいと考えた。その頃、ウイルス学の研究も宮崎ではほとんどなかったし、免疫学でも T 細胞、B 細胞という言葉が教科書に名前だけ出ていた程度であったので、病理だけではなくウイルス学や免疫学も知りたいということもあって、その頃国立大学で獣医系の博士課程があったのは東大と北大のみであったので、東大の大学院を修士から受験し、藤原先生の元で勉学することになった。藤原先生は本郷にあるキャンパスの獣医病理と東京大学医科学研究所（医科研）を兼任しておられたので、宮崎大学で担任であった榎本好和先生と相談を重ね、視野を広く持って、医学、薬学、農学、理学等の人々の所属する医科学研究所を薦められ、通称医科研に行くことにした。

そこにバラ色の人生があったわけではない。田舎にある庄内の小・中学校を卒業して、都城市の街方面にある合同選抜方式で都城西高校に入学したが、まずその際友人たちとあった時の社会的知識や諸物に対する考え方についてカルチャーショックがあった。都城の街の中学出身の友人たちとは文化度がかなり違ったと自分なりに思った。これこそ、情報の差であろうと思う。私と言え、勉強をしたことがなく、庄内の田舎で川遊び、山遊びをやり、中学 3 年の夏に、実力テストでなぜかトップになったと担任の先生からきいて、勉強をしても良いなと思い、目覚めて自主的に勉強することに腰を上げた。しかし、目覚めが遅過ぎた。その後は間断なく勉学を継続した。一生続くとはこの時点では思わなかった。その後宮崎大学の獣医学科に入学したが、得意としたのは数学、物理の純理系であったが、獣医学が文系でも通じるほど暗記物が多いのにはつらい思いをした。在学中に頭脳の切り替えを進めていき、文字（専門用語）を覚えたり、日本語の重要性を感じたりして大学になじんでいった。かつて、日本自体が工学系至上主義で、工学部のレベルが異常に高く、私も工学部志望であった。医学部はもちろんレベルが高かったが、現在と比較して医学部数は少なく狭き門で浪人が許されない家庭でもあるし、浪人で時間を使いたくなかったので、工学部系を目指した。第一志望であった工学系他大学Ⅱ期校にも同時に合格したが、長い人生を考えた時に、生物系の獣医の方が私に向いていると判断し、周囲には申し訳なかったが滑り止めにしていた宮崎大学獣医学科に入学した。そのための頭の切り替えが必要であった。都城で育った私には宮崎以外の土地のことも知りたいと言う気持ちも加味して大学院に進学し東京大学を志望して入学した。

大学時代は、運動部にも入った。空手部である。空手部は 10 人以上入部し、1 年間に鍛えて落ちていくのを待ち、残ったものが 2 年生になれる。私の同級生も 5-7 人くらいは残り通常より多かった。毎日 2 時間ある空手部の練習に行く前には、鍛えられる練習がきつく体の震えが止まらなかった覚えがある。夏合宿も厳しく、2 年間サボったことがなかったが、獣医が 4 年制であった時代なので、東大大学院のために 3 年から研究室入室と入試の勉強を始めた。入学試験科目は生物、化学、英語、ドイツ語ともう一つと病理学をはじめとする専門 7 科目での全部で 12 科目であった気がする。そこで、生物を大学入学試験で勉強してなかったので、参考書を買ってきて一週間ですべてを勉強したが、その中に、生理、解剖、発生組織、若干の微生物等の専門科目が重複する様に含まれていることに驚きを隠せなか

った。どうしてかという1年生の時に生物を勉強してきたかどうかで、専門教育にかなり差がでることが自覚できたからであった。教員として大学に帰ってきた時、待ってましたとばかりに、空手部の部長にならされ、退職まで続けることになる。ただ、紆余曲折あり、空手部の分裂等があったが、選手が大会にでる空手部はおそらく2021年3月をもって消滅したかもしれない。趣味的に型を中心に行う空手部は存続し、他の先生が部長をしている（OBたちの事情で分裂したがこちらが本流かもしれない）。

大学院修士課程の在籍は医科研である。コンピューター等の情報もない時代の幼少期から宮崎の田舎で育った私は日本で最先端の研究をしている大学院生や先生たちの使用する専門用語、すなわち一般会話がほとんどと言って良いほど理解できなかった。それで、研究論文に関する勉強と研究以外は1年間他人と話をしない決心をした。もちろん、挨拶は通常通りで、単純な会話や必要なことを無視したわけではない。そうでないと追いついていけないと感じたのである。その時の直接指導は、助手であった現在のコロナウイルス研究の第一人者である田口文広先生であった。田口先生の研究思考には素晴らしいものがあり、先輩には山田章雄さんがいて、これらの人の会話の内容には研究においても一般的なことにおいてもついていけず、よくいじられた。こんな若い時代を過ごした。MHV（マウス肝炎ウイルス）とラットのSDAV（唾液腺涙腺ウイルス）等のコロナウイルスの研究をしていたこの頃、周囲の雰囲気にも慣れてきてようやく医科研の人たちと研究を含めた会話ができるようになった。同じ時期に研究所に入った医学部出身で博士課程の菅野純夫さんはそのまま、医科研の教授となったが、いつまでも友人として付き合い続けていただいた。もう1人の薬学出身修士課程のMさんは山が好きで、南アルプスに連れて行ってもらった。後年東京医科歯科大学の助教授の時代に訪問した時、研究のために研究室で寝泊まりしておられた。その時、研究をよくやっておられたヒトが、あと数ヶ月で退職し山小屋で働くと言われた時はショックだった。理由は研究がいやではなく、若い時しかやれない好きなことをしたい、すなわち山小屋で働くと言われた時は、世の中にはすごい決断ができる人もいるなと思った。

医科研で2年目に入ってから間もなく、助教授だった上田雄幹先生が国立公衆衛生院に部長で栄転されて、私が人獣共通伝染病の部屋に誘われた。後年岐阜大学獣医学科病理学研究室の教授になられた上田先生は研究というのは突然降ってわいてくるものではなく、必ずどこかに源流があり、それを受け継いで今の研究があると言っておられた。時々それを思い出す。医学部の医者や研究は項目のかけた辞書のような様であるとも言われ、医科研にいた頃よく私も感じた。室長には後年酪農学園の教授になられた岩井さんがおられ、上品で、遅くまで研究することや、土日に仕事をするのを、労働組合の観点からやめるように強く諭された。その時諭されたことは習慣となり、土日も含め休みなく勉学に励んできた私は、そこで、自分の習慣が途絶えた。その後、1年間今の感染研である予研と言われたところにインフルエンザの研究をしに行くことになった。そこで、会ったのが根路銘国昭室長であって、最近になって共同研究を数年行った。沖縄とのつながりはここにある。かつてのつながりがどこかで、又繋がるものである。

一年後公衆衛生院に帰って、また一年半過ぎた頃、宮崎から何やら電話があった。それは大学の獣医病理の教授、野坂先生で、宮崎大学に帰って教鞭を執りなさいと言う電話であった。東京に出てくる時に、親にも相談して自分の好きな様に生きろと言われており、親からの信頼もあったので、宮崎に帰ることに難色を示した。その後、助教授立山先生からも2-3回電話があり、説得されたが宮崎に帰る気持ちにならなかった。ところが、職場の上田部長と岩井室長に呼ばれ話をされ、説得というより帰ることの重要性や、人間呼ばれる時が花ですよと言う言葉や、厚生省研究機関の再編の話も聞かされ、最終的には宮崎大学の病理学研究室に帰ることになった。しかし、ここでもバラ色の人生が待っているわけではなく、研究費は部屋単位でしか動かせなかったもので、私は研究費が一切使えなく、学生もつけてくれなかった。それで、諸事につき東京の昔の友人の助けを頂いた。病理も久しぶりに始めた上に、今思えば基本が少しあっただけなので苦労した。その後コーネル大学の最後の自然病理学者と言われたジョン・M・キング先生のもとで一年半勉強した。当然のごとく昔の英語教育を受けた身だから1年間は英語がうまく聞き取れなかった。その間、藤原公策先生や大島寛一先生、林良博先生、感染研の井上君など何人かイサカの我が家に訪問された。帰国後、病理診断能力は飛躍的に上がり、教室の運営や研究、その後の診断に関する考えがかなり変わり、病理に対する思考にも変化が見られた。すなわち、これまで病理の基本を誰からも教えてもらったことがないと言うことが明確となった。それから自分の中に病理学の学問の進歩があった。その考えは今の研究室の診断思考に影響し、現在の学生は病理が楽しいと言ってくれる。もちろん難解なことも多い。その時は病理総論に戻って考えるように指導する。ここ15年くらい、研究スタイルも含めて野外例関連の論文も多く作成した。

病理学的研究や診断に対する興味がますます増してきたのは退職間際、繰り返しになるが15年くらいになってであり、論文を書き、投稿して掲載する過程が面白い。症例を見つけては何かこの症例は珍しいはずと考え面白いところが出てくると論文を書く様に学生に促す。すべて面白いわけではないし、貴重な症例ではないが、なぜか診断していると面白く見えてくる。だから、執筆して投稿する方向で考えてみる。しかし、論文が受理されるというのは簡単ではない。無駄な繰り返し表現はだめであり、その前に何が本当の価値があるかである。多くの場合は珍しいと思いながら、調べていくうちに症例の既報が若干出てくる。それほどでもなく3-5例の報告はあるかと思い、投稿してみる。審査委員によってかなり違うが、2例しか報告はなくて貴重で珍しいと記載してもレビューとしてはいくらかでも報告があって珍しくないし、今までの報告と変わらないという。世界初の報告というのも難しく、症例は世界初でも受け付けない病理専門雑誌もある。ヒトだとたくさんあるので、動物初であってもそれがどうしましたか？というレビューもある。その場合はさすがに第3のレビューにまわされる。投稿して訂正無しで受理される経験もした。世界初とかこれしかないとかいうのが掲載されるのはこの上ない喜びであるが、投稿する時はいつも新知見と信じて投稿してる。獣医病理の世界ではそのような雑誌のインパクトファクターも1.5-2.0であるし、1.2くらいしかないこともある。これは引用数と関連があり、獣医の世界だけで引

用し、ましてや獣医病理だけであると引用数に限りがある。インパクトファクターの話で言えば、最近 10 年くらいの間にインパクトファクター 5.0 前後の論文が 10 報くらいは出ている。獣医や獣医病理に特化した論文だけでは、このインパクトファクターの論文にだすのは難しく、特化したものでは 3-4 報くらいである。獣医病理で 3-5 報 (Transboundary and emerging diseases IF 5.0 や Scientific Reports IF 5.5 など) はよくできたと思う。

学会発表に関していえば、論文を書いて記載しなければ、それほど意味はないと思っていた期間が長い。だから、研究成果はそれほど学会では発表していない。発表しても意義を感じていなかったからであった。しかし、今になってみれば、口頭発表しないと名前を覚えてもらえないし何をしている大学の先生か、その研究室で何の研究をしているのかわかってもらえない。また、学生を連れて行くことで大学間の学生交流がでると悟り始めたのは後年になってからである。だから、教授になってからはできるだけ学会、病理研修会、病理組織交見会に連れて行った。

研究室に入室する学生に恵まれた。もちろん学部学生もそうであったが、当教室は野坂先生の台湾との交流や立山先生のタイ、バンコクにあるチュラロンコーン大学との交流が着任時、着任後から始まり、私もアメリカのニューヨーク州立大学であるコーネル大学獣医学部に留学した。帰国後直ぐに JICA 専門家としてザンビアの首都ルサカのザンビア大学に、アルゼンチンのラプラタ大学に、タイの家畜衛生研究所に、その後ベトナムのハノイにあるベトナム中央研究所に派遣された。それぞれ短期派遣であるが、豊富な経験もできた。最初に派遣されたザンビア大学では滞在 3 ヶ月の間に日本での研究手法が急に進んだために帰国後の研究や病理診断環境はまるで浦島太郎の様であった。この時期に思ったのは、情報の重要性であった。3 ヶ月にわたるザンビア滞在期間に情報無しというのはその取り返しに時間がかかるということであった。

先に述べた留学生たちは帰国後もできるだけ指導する様にしたり、そうしたかったので、国費留学生の仕組みを利用して留学生を呼び入れた。呉さんは私の在籍前に、もう 1 人の呉君は私の着任の時に、その後シリアのワファ君がいたがこのあたりまでは前任の先生が呼んで指導したが、その後のアチャリヤ君、バンバン君の時、さらにその後のアヌテープ君は招聘時から私も関わった。その後、短期留学生 (1 年間) をチュラロンコーン大学から 10-20 人、ボゴール農業大学から数人を呼んで指導した。これは JASSO (独立法人日本学生支援機構) の仕組みを利用した。ボゴール農業大学のラティ君を呼んで指導したのは初めての博士の事実上の主指導だった。この頃教授でないと名目上主指導になれないため、立山先生になっていた。その後、名実ともに主指導となって指導したのはベトナム、グエン・ランさんであり、彼女は在籍時から論文を 6-10 報程度 First Author で記載した記憶がある。彼女は帰国後、数年後女性若手で初めて学長になった。その後、時代も進んでいったが、マレーシアプトラ大学 (UPM) とノーディン先生と交流が生まれ、宮崎にサバティカルリープにも一年半くらい来てくれた。そのきっかけは、UPM に共同研究を申し込み続けていたからであったが、マレーシアでは英語で獣医学教育をやっており、そこで獣医師国家試験の外部試験員

を頼まれ、2 週間缶詰でその当時の学生たちの試験をイギリス人教授と 2 人で行った。日本では東大の佐々木先生の次に頼まれて 2 人目だったらしい。その時試験を受けた学生が Angeline で、宮崎大学の獣医病理の私の元に国費留学生として博士課程に入学した。その後も Izzati がきて、同時にベトナムの Giang、Diep やミャンマーの Ohnmar がきてにぎやかになった。私は常々優秀な学生に運良く恵まれたと感じている。その間、日本人も社会人博士課程の学生が入学し、特に福家君は宮崎県の優秀な職員でありながら、大学院を続け、無事卒業した。学部学生も次々に名前が出るくらい当教室で勉学をしてきており、私が若い時と比較して、病理診断能力も格段に向上しており、基本的に優秀な学生が多い。それには、これまで獣医学教育努力してこられた多くの先生たちの力も大きいのかかもしれない。もちろん、着任時にいた修士の学生から、学部学生にも恵まれ、その頃の学生たちは定年退職を迎えたものもいるが、県では食肉検査所の所長になったものや会社では要職に就いたもの、開業して花開いたものもいる。大学で教員になってその活躍を聞くとうれしい。彼らの大きな基礎の一つは病理にある。

かつて、大学には在外研究制度という留学又はサバティカルリープのような海外研修制度があった。今でもその代わりになるものがよく探すとあるかもしれないが、現実的に先生たちが留学できる様な大学の状況ではない。在外研究は通常 1 年か 2 年に 1 人だけ、場合によっては 2 人しか利用できなかったが、順番制度で回ってこない。長期と短期があり、順番制で申し込んでいたものの定年退職までには行けない計算で、私の場合、毎年登録した上に順番を待って 80-90 歳になってから行ける計算であった。打ち切りがあり、50 又は 55 歳までしか在外研究制度は応募できなかった。ところが、毎年登録している先生方は大学を去ったり、登録をあきらめたり、定年退職したりして私の前の人たちが少なくなり私にも奇跡的に順番が回ってきた。さらに奇跡的であったのは在外研究制度を利用した最後の人間は私で、その後は廃止されたのである。アメリカには私費で留学したが、この留学制度は文科省から渡航費が出るので重宝した。イギリスのパーブライト研究所 7 ヶ月、スイスのベルン大学 2 ヶ月、アメリカのコネル大学 1 ヶ月過ごし、特に目的として遺伝子を触りたかったので（遺伝子についての教育は受けてこなかった）、パーブライトでは毎日ルーチンのごとく遺伝子の抽出、PCR を行いアガロースゲル電気泳動を実施した。この頃今の様なシークエンサーはまだ、存在せず、ガラス板を使用して少し込み入っていたのでやらせてもらえなかった。ベルン大学では In situ hybridization をおこなった。ウイルスはすべて RNA であってこれらを病理の部屋でセットアップしようと思って試みたが何年もかかった。理由は、水も、試薬も、機械もすべて違うことにあった。特に UV 装置は医学部で廃棄したものを頂いたが、その UV が強く遺伝子はズタズタに切れていたとわかったのは新しい機械を購入してからである。だから、5 年～10 年かかっている。その間に世の中の遺伝子技術は進んでいったので、これで精一杯でその技術は病理材料で応用できた。

獣医病理学会関係あるいはかつての獣医学会病理分科会でも若い時から活動させてもらった。病理は元来、診断技術を必要として、一人前になるのに 10 年は最低かかると言われ

てきた。これは最近考えるに、教える側の診断技術問題、本（専門書）が揃っている環境、ディスカッションできる環境、顕微鏡を見る時のセンスなど他のファクターも大いに関係がある。診断材料の多少も関係あり、研修会に参加すると「そのような例はいくらでもある」と発言する人がいるがそのような例がいくらでもある材料を提出する側としては考えてしまう。ほんとうか？そこで最初に考えたのが、全国の大学の獣医病理の若手が集まる会を作って最低限の勉強をしていけば、獣医病理学の先生方の共通認識が高まり、それが学生教育に波及して底辺が高まる。考えて若手の勉強会を発起することにした。教授の先生方にも理解を求め、開始したが、スタートすると問題も生じる。それは獣医関係大学以外の会員の不満であった。診断基準なども取り扱った。しかし、数年で、学会の方でこれが取りあげられる様な形となり、学会で診断基準の会を設ける様になった。獣医病理学としては良い方向に向かったと考えている。さらに、病理組織交見会にも参加させていただいた。大学としての参加は早い方で、後に学生を積極的に参加させるが、コロナ禍の前は1年のうちで楽しみな勉強会でもあった。鹿児島の九州・山口の病理研修会も立ち上げる様にけしかけてこれも今に至っている。もちろん私が立ち上げたわけではないが、きっかけを作ったわけで今では感染症はここで議論される。さらに、関西の勉強会にも参加させてもらうことになっていたが、何かのきっかけで、参加できなかった。参加機会を失った。九州にも作ろうと仕掛けを作ったが、実行者が諸事情で開始を手間取り、夢の会となった。実は開催の適任者を探すのが困難で、決めていた実行者は適任ではあったが、所属機関の事情で、より多忙となり困難になったと思われる。その次が出てこなかった。私自身がやろうとしたが、この規模をやるとすると、1人では困難と考えた。未だに夢の九州地区の病理勉強会である。

獣医学再編の話は、学生の頃から鹿児島大学と一緒に話になる話が再三にわたって出たが、出では引っ込み、4大学で再編や九大案などもでた。宮崎大学は九大案を4大学でと言う案を積極的に進めたが、鹿児島大学が抜け、鳥取大学が抜け、最後に山口大学と宮崎大学が九大に作る方向で動いていたのだが、山口大学も、その間学部長が数回替わり、学長の発言の齟齬などが重なり、降りることになり、最後に宮崎大学だけで九大に作るようになったが、とても一大学では作れないとなったのか宮崎大学の九大案は消えてしまい、また宮崎大学に残ることになった。そのうち地方でも博士課程を持つという話になり、連合獣医学の話がでた。鹿児島、宮崎、山口、鳥取の4大学連合で博士課程を作った。変則的ではあったがそれなりの時代的効果はあった。山口大学が基幹校となった。研究科長は常に山口大学からしか出てこなかった、というより、基幹校から研究科長は選ぶ仕組みだった。名前は山口大学連合獣医学研究科博士課程となり、傘下校の名前が大学院の名前に出ることはなかった。発表業績を報告する機会があるが、4大学の業績は常に山口大学の名前となり、宮崎大学の当時の学長は大学の業績に宮崎大学の名前がなく、常に山口大学の名前になったことがとても悔しい様で宮崎大学は医学部と獣医一緒に大学院を作ることによりとうとう離脱することになった。イギリスのエジンバラ大学方式になった。分野横断的課題に対し、人、動物、環境に関わる者が連携して取り組む One Health という考え方が広がり、その先端に行く大学

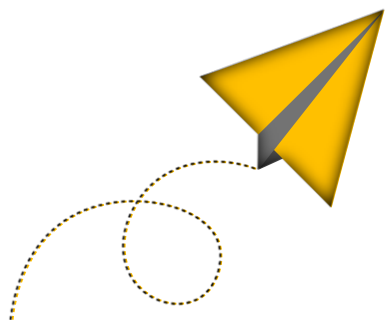
院となった。動物由来感染症は人の感染症のうち 70-80%と言われている。感染症だけではなく、他の疾病も共通するものがたくさんある。発展することを祈る。獣医学にとっても、医学部にとっても特徴的な大学院になった。

当研究室はウイルスなどの BSL2 の病原体に触れる部屋となり、遺伝子もかつてから触れており現在では Realtime PCR も可能になった。パラフィンから遺伝子を抽出するのに PCR や抽出できる設備は欠かせない。さらに、免疫染色の賦活化をするオートクレーブやマイクロウェーブも欠かせない。超低温冷凍庫も欠かせず、最低限の必要な機器はそろえられた。細かなものではピペットマン 10~20 セット、研究するにもほとんどまかなえている。自分で作成しなくても抗体は多く市販され、病理学的に調査するにしても困らないほどである。病理学的に研究することもかつてよりやりやすくなった。実験台も、棚も新設してドラフトも新しくなり、後進の者が研究をできる様に整備した。ただ、最近は標識 2 次抗体が驚くほど高額になっている。抗体関係はそろってはいるが、一つ一つが高額である。研究や診断を続けるにはそろえていかなければならない。

病理学は、労力の割には成果の効果が大きくない気がする。臨床の様に表に出ず、基礎の中でも派手な新しい結果を生むには厳しい。ただ、常に臨床と同じように歩き、臨床と切り離せない。病理ではイヌ、ネコ、マウス、ウシ、ウマ、山羊、羊、野生動物、鶏、トリ、魚をすべてやらなければならないし、やる必要もある。産業動物病理学という分野も作れるし宮崎大学の進むべき道としては将来その名前の講座もあった方が良いが、やはり、その分野（講座）を作っても他の動物の診断もやることによって病理は進歩する。病理形態について診断・研究するのは楽しい。しかし、臨床や基礎に対してさらに後進の育成に対しての教育や対応は義務である。多方面から相談も多い。だから、いくら時間があっても足りないし、1 講座を 1 人や 2 人では本当にやれない。ましてや 1 人では講義・実習もやれない。医学部は 3 人体制で病理 2 講座に加えて病院病理があり、秘書と多くの技官がいる。海外でも病理のスタッフは 10 人くらいの体制で実施され、加えてテクニシャンと秘書が別にいる。病理の当教室が、1 人加えて 2 人だけではなくさらに増員してほしいものである。現在は学科の理解もあり 2 人体制にはしてくれと考えている。

退職に当たって、退官と言う言葉は、国家公務員であった時の名残である。病理をやって良かったが、常に努力をしなければならないし、諸方面に時間を使うことに抵抗があった。だから、会議が行われるとそれに苦痛を感じた。体制であるから、会議はしょうがないが、会議は極力少ない方がよい。臨床と付き合うことは多いが、臨床がいつも生きている動物相手の様に病理も早い診断を迫られ待ったなしである。その上、独自の研究もしなければならないし、講義や学外の卒後教育も必要である。診断の時に常に学生とディスカッションをして最終診断をするので、常なる学生相手がある。先生に診断能力がないと、さらに厳しい。そのような状況で逆に学生とのディスカッションは楽しかった。講義も年によって異なるが、通常は難しいと考えている学生たちにわからせることが、基礎と臨床を結ぶ病理を理解してもらうことは醍醐味であった。病理から臨床、病理から基礎どちらもアドバンテージが

あると思う。その分野を専攻できたのは良かった。これで、退職するが、JCVP（獣医病理専門家協会）の実行委員長になり、その後名誉会員になったので、研修会は今後も参加できることになる。だから、こちらから手を切らない限り病理とは関連できる。今後、平井先生が宮崎大学の病理学研究室を運営していくと思うが平井先生と卒業生の活躍を祈念して文を閉じる。



山口良二教授の略歴



氏名	山口 良二 (やまぐち りょうじ)
生年月日	昭和 30 年 4 月 3 日
学歴	昭和 53 年 宮崎大学農学部獣医学科卒業 昭和 55 年 東京大学獣医学専門課程修士課程修了 (東京大学医科学研究所 配置)
職歴	昭和 56 年 4 月 厚生技官研究職 (国立公衆衛生院獣医学研究部人畜共通伝染病室) 昭和 59 年 宮崎大学農学部獣医学科助手 平成 3 年 宮崎大学農学部獣医学科助教授 平成 19 年 宮崎大学農学部獣医学科教授 令和 3 年 宮崎大学農学部獣医学科特別教授
受賞	平成 3 年 日本小動物獣医学会 ((九州) 地区学会賞 平成 6 年 日本小動物獣医学会 (九州) 地区学会賞 平成 18 年 後藤養鶏学術奨励賞 平成 26 年 *ベトナム政府から功労賞を授与 平成 27 年 第 7 回国際新興・再興感染症豚病学会最優秀学生賞 平成 29 年 日本公衆衛生学会 (九州) 地区学会賞

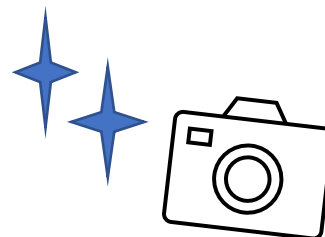
*宮崎大学農学部 News (2014 年 7 月 15 日)

2014 年 6 月 10 日にハノイ農業大学において、本学農学部病理学研究室の山口良二教授に、ベトナムの農業・農村開発省の大臣から**功労賞**および記念メダルが授与されました。受賞の理由は、ベトナムの社会経済全般の発展への寄与（特にハノイ農業大学獣医学部の発展に対する顕著な貢献と同国の農業分野の国際的専門的発展をもたらしたこと）によるものです。事実、山口教授は 2002 年からこれまでの 19 年間、本学とハノイ農業大学との間に大学間協定の締結や同国における獣医学分野での人材育成（留学生の受入れや博士の輩出）、現地での技術指導や様々な農業問題への提言、ハノイ農業大学内での実験室や最新機器の設置等、様々な支援活動を行っており、多数の留学生を受入れて指導されてきました。この

ような長い年月での様々な支援活動が高く評価されています。式典には農業・農村開発省の代理人、ハノイ農業大学学長のチャン・ドウィック・ビエン教授、国際部門の責任者、獣医学部長及び関係するスタッフ等が出席し、農業・農村開発省の大臣の代理として、チャン学長から山口教授に表彰状と記念メダルが授与され、農業や農村開発の発展だけでなく、二国間協力と相互理解の促進への多大な貢献に対し、祝辞が述べられました。式典の後には祝賀会が行われ、これまでの山口教授が指導した学生や社会人、大学関係者等約 80 名が参加して受賞を祝いました。これまでに、このような表彰を受けたのは、ベルギー人 2 名、アメリカ人 1 名、日本人 2 名のわずか 5 名で、大学教職員では初めてです。近年、我が国では大学のグローバル化、グローバル人材の育成あるいは留学生の受入れなどが国策として加速的に進んでいますが、山口教授はまさにそれらのパイオニアとして多大な貢献をされてきました。



表彰状を手にする山口教授（左）とチャン学長



研究業績

No.	発表年 (西暦)	発表論文名・著者名 等
1. ○	2022 年 (In press)	Suwanruengsri M, Uemura R, Izzati UZ, Kanda T, Fuke N, Yasuda M, Hirai T, <u>Yamaguchi R</u> . 2021. Natural <i>Mycoplasma bovis</i> infection associated with epithelioid granulomatous bronchiolitis at a progressed disease stage in calves. Thai J Vet Med.
2.	2022 年	Kaneda-Nakashima K, Igawa K, Suwanruengsri M, Naoyuki F, Ichikawa T, Funamoto T, Kurogi S, Sekimoto T, Yamashita Y, Chosa E, <u>Yamaguchi R</u> , Morishita K. Role of Mel1/Prdm16 in bone differentiation and morphology. Exp Cell Res. 2022 Jan 15;410(2):112969.
3. ○	2021 年	Nueangphuet P, Suwanruengsri M, Fuke N, Uemura R, Hirai T, <u>Yamaguchi R</u> . 2021. Swine consolidated pneumonia in natural infection associated with <i>Mycoplasma hyopneumoniae</i> demonstrating neutrophil and M2-polarized macrophage infiltration and expression of IL-8 and apoptosis. J Comp Pathol. 2021 Nov;189:31-44.
4. ○	2021 年	Suwanruengsri M, Uemura R, Kanda T, Fuke N, Nueangphuet P, Pornthummawat A, Yasuda M, Hirai T, <u>Yamaguchi R</u> . 2021. Production of granulomas in <i>Mycoplasma bovis</i> infection associated with meningitis-meningoencephalitis, endocarditis, and bronchopneumonia in cattle. J Vet Diagn Invest. 2022 Jan;34(1):68-76.
5. ○	2021 年	Izzati UZ, Kaneko Y, Kaneko C, Yoshida A, Suwanruengsri M, Okabayashi T, Hirai T, <u>Yamaguchi R</u> . 2021. Distribution of Pseudorabies virus antigen in hunting dogs with concurrent <i>Paragonimus westermani</i> infection. J Comp Pathol. 188:44-51.
6. ○	2021 年	Nueangphuet P, Tanabe M, Izzati UZ, Fuke N, Hirai T, <u>Yamaguchi R</u> . 2021. Adenomyomatous uterine polyp in a Miniature Pinscher: histologic, immunohistochemical, and clinical aspects. J Vet Diagn Invest. September.
7. ○	2021 年	Fuke N, Diep NV, Hirai T, Suwanruengsri M, Izzati UZ, <u>Yamaguchi R</u> . 2021. Three neoplasms in a Eurasian otter (<i>Lutra lutra</i>): malignant melanoma, trichoblastoma and mammary gland adenoma. J Vet Med Sci. September.
8. ○	2021 年	Pornthummawat A, Truong QL, Hoa NT, Lan NT, Izzati UZ, Suwanruengsri M, Nueangphuet P, Hirai T, <u>Yamaguchi R</u> . 2021. Pathological lesions and presence of viral antigens in four surviving pigs in African swine fever outbreak farms in Vietnam. J Vet Med Sci. September. 2021.
9. ○	2021 年	Suwanruengsri M, Uemura R, Uzzati UZ, Kanda T, Fuke N, Yasuda M, Hirai T, <u>Yamaguchi R</u> . 2021. <i>Mycoplasma bovis</i> may travel

		along the Eustachian tube to cause meningitis in Japanese Black Cattle. J Comp Pathol. 188:13-20.
10.	2021 年	Fauzi YR, Nakahata S, Chilmi S, Ichikawa T, Nueangphuet P, <u>Yamaguchi R</u> , Nakamura T, Shimoda K, Morishita K. 2021. Antitumor effects of chloroquine/hydroxychloroquine mediated by inhibition of the NF-κB Signaling pathway through abrogation of autophagic p47 degradation in adult T-cell leukemia/lymphoma cells. PLoS ONE;16(8):e0256320.
11. ○	2021 年	Teh APP, Kitahara G, Izzati UZ, Mori K, Fuke N, Hirai T, <u>Yamaguchi R</u> . 2021. Immunohistochemical and Morphological features of Bovine granulosa cell tumors in relation to Growth pattern and folliculogenesis. J Comp Pathol. 187:40-51.
12. ○	2021 年	Myint O, Hoa NT, Fuke N, Pornthummawat A, Lan NT, Hirai T, Yoshida A, <u>Yamaguchi R</u> . 2021. A persistent epidemic of Porcine epidemic diarrhoea virus infection by serological survey of commercial pig farms in northern Vietnam. BMC Veterinary Researcrh. July;17:235.
13.	2021 年	Kaneko C, Kaneko Y, Sudaryatma PE, Mekata H, Kirino Y, <u>Yamaguchi R</u> , Okabayashi T. Pseudorabies virus infection in hunting dogs in Oita, Japan: Report from a prefecture free from Aujeszky's disease in domestic pigs. J Vet Med Sci.83:680-684.
14.	2021 年	Ito S, Hirai T, Hamabe S, Subangkit M, Okabayashi T, Goto Y, Kurita T, <u>Yamaguchi R</u> . Suppurative necrotizing bronchopneumonia caused by Nocardia cyriacigeorgica infection in a stranded striped dolphin (Stenella coeruleoalba) in Japan. J Vet Med Sci. 83: 146-150.
15. ○	2020 年	Sakashita T, Kaneko Y, Izzati UZ, Hirai T, Fuke N, Torisu S, <u>Yamaguchi R</u> . 2020. Disseminated Pneumocystosis in a Toy Poodle. J Comp Pathol. Feb;175:85-89.
16. ○	2020 年	Fuke N, Kitahara G, Ito S, Van Diep N, Ping Teh AP, Izzati UZ, Myint O, Hirai T, Torisu S, Kaneko Y, Sato H, Hidaka Y, Osawa T, <u>Yamaguchi R</u> . 2020. Severe Degenerative Changes in Cryptorchid Testes in Japanese Black Cattle. Vet Pathol. May;57(3):418-426.
17. ○	2020 年	Van Diep N, Choijookhuu N, Fuke N, Myint O, Izzati UZ, Suwanruengsri M, Hishikawa Y, <u>Yamaguchi R</u> . 2020. New tropisms of porcine epidemic diarrhoea virus (PEDV) in pigs naturally coinfecting by variants bearing large deletions in the spike (S) protein and PEDVs possessing an intact S protein. Transbound Emerg Dis. 67:2589-2601.
18. ○	2020 年	Izzati UZ, Hoa NT, Lan NT, Diep NV, Fuke N, Hirai T, <u>Yamaguchi R</u> . 2020. Pathology of the outbreak of subgenotype 2.5 classical swine fever virus in northern Vietnam. Vet Med Sci. 7:164-174.
19. ○	2020 年	Myint O, Suwanruengsri M, Araki K, Izzati UZ, Pornthummawat A, Nueangphuet P, Fuke N, Hirai T, Jackwood DJ, <u>Yamaguchi R</u> .

		2020. The bursa atrophy at 28 days old by the variant infectious bursal disease virus makes a negative economic impact on broiler farms in Japan. <i>Avian Pathol.</i> Sep 21:1-41.
20. ○	2020 年	Izzati UZ, Inanaga M, Hoa NT, Nueangphuet P, Myint O, Truong QL, Lan NT, Norimine J, Hirai T, <u>Yamaguchi R</u> . 2020. Pathological investigation and viral antigen distribution of emerging African swine fever in Vietnam. <i>Transbound Emerg Dis.</i> 68:2039-2050.
21.	2020 年	Chilmi S, Nakahata S, Fauzi YR, Ichikawa T, Tani C, Suwanruengsri M, <u>Yamaguchi R</u> , Matsuura T, Kurosawa G, Morishita K. 2020. Development of anti-human CADM1 monoclonal antibodies as a potential therapy for adult T-cell leukemia/lymphoma. <i>Int J Hematol.</i> Oct;112(4):496-503.
22. ○	2019 年	Izzati UZ, Hidaka Y, Hirai T, <u>Yamaguchi R</u> . 2019. Immunohistochemical Profile of Ameloblastic Carcinoma Arising from an Amyloid-Producing Odontogenic Tumour in a Miniature Dachshund. <i>J Comp Pathol.</i> Jan;166:54-58.
23.	2019 年	Kanda T, Tanaka S, Suwanruengsri M, Sukmawinata E, Uemura R, <u>Yamaguchi R</u> , Sueyoshi M. 2019. Bovine Endocarditis Associated with <i>Mycoplasma bovis</i> . <i>J Comp Pathol.</i> Aug;171:53-58.
24. ○	2019 年	Myint O, Yoshida A, Sekiguchi S, Van Diep N, Fuke N, Izzati UZ, Hirai T, <u>Yamaguchi R</u> . 2019. Development of indirect enzyme-linked immunosorbent assay for detection of porcine epidemic diarrhea virus specific antibodies (IgG) in serum of naturally infected pigs. <i>BMC Vet Res.</i> Nov 12;15(1):409.
25.	2019 年	Niazmand MH, Hirai T, Ito S, Habibi WA, Noori J, Hasheme R, <u>Yamaguchi R</u> . 2019. Causes of death and detection of antibodies against Japanese encephalitis virus in Misaki feral horses (<i>Equus caballus</i>) in southern Japan, 2015-17. <i>J Wildl Dis.</i> Oct;55(4):804-811.
26. ○	2018 年	Teh APP, Izzati UZ, Diep NV, Hirai T, <u>Yamaguchi R</u> . 2018. Merkel Cell Carcinoma in a Steer. <i>J Comp Pathol.</i> Jan;158:17-21.
27. ○	2018 年	Diep NV, Sueyoshi M, Izzati U, Fuke N, Teh APP, Lan NT, <u>Yamaguchi R</u> . 2018. Appearance of US-like porcine epidemic diarrhoea virus (PEDV) strains before US outbreaks and genetic heterogeneity of PEDVs collected in Northern Vietnam during 2012-2015. <i>Transbound Emerg Dis.</i> Feb;65(1):e83-e93.
28.	2018 年	Ali MN, Chojookhuu N, Takagi H, Srisowanna N, Nguyen Nhat Huynh M, Yamaguchi Y, Synn Oo P, Tin Htwe Kyaw M, Sato K, <u>Yamaguchi R</u> , Hishikawa Y. 2018. The HDAC Inhibitor, SAHA, Prevents Colonic Inflammation by Suppressing Pro-inflammatory Cytokines and Chemokines in DSS-induced Colitis. <i>Acta Histochem Cytochem.</i> Feb 27;51(1):33-40.
29. ○	2018 年	Van Diep N, Sueyoshi M, Norimine J, Hirai T, Myint O, Teh APP, Izzati UZ, Fuke N, <u>Yamaguchi R</u> . 2018. Molecular characterization of US-like and Asian non-S INDEL strains of porcine epidemic

		diarrhea virus (PEDV) that circulated in Japan during 2013-2016 and PEDVs collected from recurrent outbreaks. BMC Vet Res. Mar 14;14(1):96.
30.	2018 年	Teh APP, Hirai T, Ito S, Hidaka Y, Goto Y, Furukawa H, Sawada J, <u>Yamaguchi R.</u> 2018. Local extensive granulomatous inflammation of the neck region and lymphangitis caused by Lichtheimia corymbifera infection in a Japanese Black calf. Med Mycol Case Rep. Apr 17;21:37-40.
31.	2018 年	Mai TN, Nguyen VD, Yamazaki W, Okabayashi T, Mitoma S, Notsu K, Sakai Y, <u>Yamaguchi R.</u> Norimine J, Sekiguchi S. 2018. Development of pooled testing system for porcine epidemic diarrhoea using real-time fluorescent reverse-transcription loop-mediated isothermal amplification assay. BMC Vet Res. May 29;14(1):172.
32.	2018 年	Kitahara G, El-Sheikh Ali H, Teh A, Hidaka Y, Haneda S, Mido S, <u>Yamaguchi R.</u> Osawa T. 2018. Characterization of anti-Müllerian hormone in a case of bovine male pseudohermaphroditism. Reprod Domest Anim. Jun;53(3):809-813.
33. ○	2018 年	Teh A, Izzati UZ, Mori K, Fuke N, Hirai T, Kitahara G, <u>Yamaguchi R.</u> 2018. Histological and immunohistochemical evaluation of granulosa cells during different stages of folliculogenesis in bovine ovaries. Reprod Domest Anim. Jun;53(3):569-581.
34.	2018 年	Nerome K, <u>Yamaguchi R.</u> Fuke N, Izzati UZ, Maegawa K, Sugita S, Kawasaki K, Kuroda K, Nerome R. 2018. Development of a Japanese encephalitis virus genotype V virus-like particle vaccine in silkworms. J Gen Virol. Jul;99(7):897-907.
35.	2018 年	Maegawa K, Shibata T, <u>Yamaguchi R.</u> Hiroike K, Izzati UZ, Kuroda K, Sugita S, Kawasaki K, Nerome R, Nerome K. 2018. Overexpression of a virus-like particle influenza vaccine in Eri silkworm pupae, using Autographa californica nuclear polyhedrosis virus and host-range expansion. Arch Virol. Oct;163(10):2787-2797.
36. ○	2017 年	Diep NV, Norimine J, Sueyoshi M, Lan NT, <u>Yamaguchi R.</u> 2017. Novel Porcine Epidemic Diarrhea Virus (PEDV) Variants with Large Deletions in the Spike (S) Gene Coexist with PEDV Strains Possessing an Intact S Gene in Domestic Pigs in Japan: A New Disease Situation. PLoS One. Jan 17;12(1):e0170126.
37.	2017 年	Tani C, Pratakpiriya W, Tani M, Yamauchi T, Hirai T, <u>Yamaguchi R.</u> Ano H, Katamoto H. 2017. Histopathological changes in the pancreas of cattle with abdominal fat necrosis. J Vet Med Sci. Jan 20;79(1):52-59.
38. ○	2017 年	Pratakpiriya W, Ping Teh AP, Radtanakatikanon A, Pirarat N, Thi Lan N, Takeda M, Techangamsuwan S, <u>Yamaguchi R.</u> 2017. Expression of canine distemper virus receptor nectin-4 in the central nervous system of dogs. Sci Rep. Mar 23;7(1):349.
39. ○	2017 年	Teh AP, Pratakpiriya W, Hidaka Y, Sato H, Hirai T, <u>Yamaguchi R.</u> 2017. An atypical case of recurrent carotid body carcinoma in a

		young adult dog: Histopathological, immunohistochemical and electron microscopic study. J Vet Med Sci. Apr 5;79(4):714-718.
40.	2017 年	Matsuda S, Nerome R, Maegawa K, Kotaki A, Sugita S, Kawasaki K, Kuroda K, <u>Yamaguchi R</u> , Takasaki T, Nerome K. 2017. Development of a Japanese encephalitis virus-like particle vaccine in silkworms using codon-optimised prM and envelope genes. Heliyon. Apr 11;3(4):e00286.
41.	2017 年	Tamura T, Ichikawa T, Nakahata S, Kondo Y, Tagawa Y, Yamamoto K, Nagai K, Baba T, <u>Yamaguchi R</u> , Futakuchi M, Yamashita Y, Morishita K. 2017. Loss of NDRG2 Expression Confers Oral Squamous Cell Carcinoma with Enhanced Metastatic Potential. Cancer Res. May 1;77(9):2363-2374.
42.	2017 年	Habibi WA, Hirai T, Niazmand MH, Okumura N, <u>Yamaguchi R</u> . 2017. Experimental induction of chicken amyloid A amyloidosis in white layer chickens by inoculation with inactivated vaccines. Avian Pathol. Oct;46(5):497-505.
43. ○	2017 年	Hamamura M, Oshikata T, Katoku K, Tsuchitani M, <u>Yamaguchi R</u> . 2017. Two types of deposits, hyaline droplets and eosinophilic bodies, associated with $\alpha(2u)$ -globulin accumulation in the rat kidney. J Toxicol Pathol. Oct;30(4):275-282.
44. ○	2016 年	Huong Giang NT, Lan NT, Nam NH, Hirai T, <u>Yamaguchi R</u> . 2016. Pathological Characterization of an Outbreak of Porcine Reproductive and Respiratory Syndrome in Northern Vietnam. J Comp Pathol. Feb-Apr;154(2-3):135-49.
45.	2016 年	Kaneko Y, Torisu S, Hagio M, <u>Yamaguchi R</u> , Mizutani S, Naganobu K. 2016. A case report of suspected hepatopulmonary syndrome secondary to ductal plate malformation with chronic active hepatitis in a dog. J Vet Med Sci. Mar;78(3):493-7.
46.	2016 年	Fuke N, Hirai T, Makimura N, Goto Y, Habibi WA, Ito S, Trang NT, Koshino K, Takeda M, <u>Yamaguchi R</u> . 2016. Non-tuberculous Mycobacteriosis with T-cell Lymphoma in a Red Panda (<i>Ailurus fulgens</i>). J Comp Pathol. Aug-Oct;155(2-3):263-266.
47.	2015 年	Trang NT, Hirai T, Ngan PH, Lan NT, Fuke N, Toyama K, Yamamoto T, <u>Yamaguchi R</u> . 2015. Enhanced detection of Porcine reproductive and respiratory syndrome virus in fixed tissues by in situ hybridization following tyramide signal amplification. J Vet Diagn Invest. May;27(3):326-31.
48. ○	2015 年	Van Diep N, Norimine J, Sueyoshi M, Lan NT, Hirai T, <u>Yamaguchi R</u> . 2015. US-like isolates of porcine epidemic diarrhea virus from Japanese outbreaks between 2013 and 2014. Springerplus. Dec 2;4:756.
49.	2014 年	Nakahata S, Ichikawa T, Maneesaay P, Saito Y, Nagai K, Tamura T, Manachai N, Yamakawa N, Hamasaki M, Kitabayashi I, Arai Y, Kanai Y, Taki T, Abe T, Kiyonari H, Shimoda K, Ohshima K, Horii A, Shima H, Taniwaki M, <u>Yamaguchi R</u> , Morishita K. 2014. Loss of NDRG2 expression activates PI3K-AKT signalling via PTEN

		phosphorylation in ATLL and other cancers. Nat Commun. Feb 26;5:3393.
50.	2014 年	Officer K, Lan NT, Wicker L, Hoa NT, Weegenaar A, Robinson J, Yamaguchi R , Loukopoulos P. 2014. Foot-and-mouth disease in Asiatic black bears (<i>Ursus thibetanus</i>). J Vet Diagn Invest. Sep;26(5):705-13.
51.	2014 年	Trang NT, Hirai T, Nabeta R, Fuke N, Yamaguchi R . 2014. Membranoproliferative glomerulonephritis in a calf with nephrotic syndrome. J Comp Pathol. 151(2-3):162-5.
52.	2014 年	Trang NT, Hirai T, Yamamoto T, Matsuda M, Okumura N, Giang NT, Lan NT, Yamaguchi R . 2014. Detection of porcine reproductive and respiratory syndrome virus in oral fluid from naturally infected pigs in a breeding herd. J Vet Sci. 15(3):361-7.
53.	2013 年	Sakai K, Nagata N, Ami Y, Seki F, Suzaki Y, Iwata-Yoshikawa N, Suzuki T, Fukushima S, Mizutani T, Yoshikawa T, Otsuki N, Kurane I, Komase K, Yamaguchi R , Hasegawa H, Saijo M, Takeda M, Morikawa S. 2013. Lethal canine distemper virus outbreak in cynomolgus monkeys in Japan in 2008. J Virol. Jan;87(2):1105-14.
54.	2013 年	Otsuki N, Sekizuka T, Seki F, Sakai K, Kubota T, Nakatsu Y, Chen S, Fukuhara H, Maenaka K, Yamaguchi R , Kuroda M, Takeda M. 2013. Canine distemper virus with the intact C protein has the potential to replicate in human epithelial cells by using human nectin4 as a receptor. Virology. Jan 20;435(2):485-92.
55.	2013 年	Sakai K, Yoshikawa T, Seki F, Fukushima S, Tahara M, Nagata N, Ami Y, Mizutani T, Kurane I, Yamaguchi R , Hasegawa H, Saijo M, Komase K, Morikawa S, Takeda M. 2013. Canine distemper virus associated with a lethal outbreak in monkeys can readily adapt to use human receptors. J Virol. Jun;87(12):7170-5.
56.	2013 年	Radtanakatikanon A, Keawcharoen J, Charoenvisal NT, Poovorawan Y, Prompetchara E, Yamaguchi R , Techangamsuwan S. 2013. Genotypic lineages and restriction fragment length polymorphism of canine distemper virus isolates in Thailand. Vet Microbiol. Sep 27;166(1-2):76-83.
57.	2013 年	El-Sheikh Ali H, Kitahara G, Nibe K, Yamaguchi R , Horii Y, Zaabel S, Osawa T. 2013. Plasma anti-Müllerian hormone as a biomarker for bovine granulosa-theca cell tumors: comparison with immunoreactive inhibin and ovarian steroid concentrations. Theriogenology. Nov;80(8):940-9.
58.	2013 年	Otsuki N, Nakatsu Y, Kubota T, Sekizuka T, Seki F, Sakai K, Kuroda M, Yamaguchi R , Takeda M. 2013. The V protein of canine distemper virus is required for virus replication in human epithelial cells. PLoS One. Dec 17;8(12):e82343.
59. ○	2012 年	Thai TH, Hirai T, Lan NT, Yamaguchi R . 2012. Antibiotic resistance profiles of <i>Salmonella</i> serovars isolated from retail pork and chicken meat in North Vietnam. Int J Food Microbiol. May 15;156(2):147-51.

60. ○	2012 年	Thai TH, Hirai T, Lan NT, Shimada A, Pham TN, <u>Yamaguchi R.</u> 2012. Antimicrobial Resistance of Salmonella Serovars Isolated from Beef at Retail Markets in the North Vietnam. J Vet Med Sci. May 22;74(9):1163-1169.
61. ○	2012 年	Thai TH, <u>Yamaguchi R.</u> 2012. Molecular characterization of antibiotic-resistant Salmonella isolates from retail meat from markets in Northern Vietnam. Journal of Food Protection. Sep 01;75(9):1709-1714.
62. ○	2012 年	Pratakpiriya W, Seki F, Otsuki N, Sakai K, Fukuhara H, Katamoto H, Hirai T, Maenaka K, Techangamsuwan S, Lan N, Takeda M, <u>Yamaguchi R.</u> 2012. Nectin4 is an epithelial cell receptor for canine distemper virus and involved in the neurovirulence. J Virol. Sep;86(18):10207-10.
63. ○	2012 年	Thai TH, Lan NT, Hirai T, <u>Yamaguchi R.</u> 2012. Antimicrobial resistance in Salmonella serovars isolated from meat shops at the markets in North Vietnam. Foodborne Pathog Dis. Nov;9(11):986-91.
64. ○	2012 年	Moriyama A, Maeda H, Hirai T, <u>Yamaguchi R.</u> 2012. Pathological effects in lymphoid tissues of the spleen, lymph nodes, and Peyer's patches in cyclosporin-treated cynomolgus monkeys. J Vet Med Sci. Nov;74(11):1487-91.
65. ○	2011 年	Moriyama A, Fujishima J, Furukawa T, Yoshikawa T, Kodama R, Sasaki Y, Nagaoka T, Kamimura Y, Maeda H, Hirai T, <u>Yamaguchi R.</u> 2011. Quantitative analyses of lymphoid tissue in the spleen, lymph nodes and Peyer's patches in cynomolgus monkeys. J Vet Med Sci. Nov;73(11):1459-64.
66. ○	2010 年	Techangamsuwan S, Ngamkala S, Sailasuta A, Rungsipipat A, <u>Yamaguchi R.</u> 2010. A negative search of acute canine distemper virus infection in DogSLAM transgenic C57BL/6 mice. Songklanakarin J. Sci. Technol. Nov-Dec;32(6), 537-546.
67. ○	2009 年	Lan NT, <u>Yamaguchi R.</u> , Kien TT, Hirai T, Hidaka Y, Nam NH. 2009. First isolation and characterization of canine distemper virus in Vietnam with the immunohistochemical examination of the dog. J Vet Med Sci. Feb;71(2):155-62.
68. ○	2009 年	Lan NT, <u>Yamaguchi R.</u> , Hirai T, Kai K, Morishita K. 2009. Relationship between growth behavior in vero cells and the molecular characteristics of recent isolated classified in the Asia 1 and 2 groups of canine distemper virus. J Vet Med Sci. Apr;71(4):457-61.
69.	2009 年	Sultan S, Charoenvisal N, Lan NT, <u>Yamaguchi R.</u> , Maeda K, Kai K. 2009. The Asia 2 specific signal peptide region and other domains in fusion protein genes characterized Asia 1 and Asia 2 canine distemper viruses. Virol J. Oct 6;6:157.
70.	2009 年	Sultan S, Lan NT, Ueda T, <u>Yamaguchi R.</u> , Maeda K, Kai K. 2009. Propagation of Asian isolates of canine distemper virus (CDV) in hamster cell lines. Acta Vet Scand. Oct 16;51(1):38.

71.	2009 年	Rungsipipat A, Oda M, Kumpoosiri N, Wangnaitham S, Poosoonthontham S, Komkaew W, Suksawat F, Yamaguchi R . 2009. Clinicopathological study of experimentally induced canine monocytic ehrlichiosis. <i>Comp Clin Pathol</i> . 18(1):13-22.
72.	2008 年	Hidaka T, Nakahata S, Hatakeyama K, Hamasaki M, Yamashita K, Kohno T, Arai Y, Taki T, Nishida K, Okayama A, Asada Y, Yamaguchi R , Tsubouchi H, Yokota J, Taniwaki M, Higashi Y, Morishita K. 2008. Down-regulation of TCF8 is involved in the leukemogenesis of adult T-cell leukemia/lymphoma. <i>Blood</i> . Jul 15;112(2):383-93.
73.	2007 年	Martella V, Elia G, Lucente MS, Decaro N, Lorusso E, Banyai K, Blixenkrone-Møller M, Lan NT, Yamaguchi R , Cirone F, Carmichael LE, Buonavoglia C. 2007. Genotyping canine distemper virus (CDV) by a hemi-nested multiplex PCR provides a rapid approach for investigation of CDV outbreaks. <i>Vet Microbiol</i> . May 16;122(1-2):32-42.
74. ○	2007 年	Lan NT, Yamaguchi R , Kawabata A, Uchida K, Sugano S, Tateyama S. 2007. Comparison of molecular and growth properties for two different canine distemper virus clusters, Asia 1 and 2, in Japan. <i>J Vet Med Sci</i> . Jul;69(7):739-44.
75.	2007 年	Gunimaladevi I, Savan R, Sato K, Yamaguchi R , Sakai M. 2007. Characterization of an interleukin-15 like (IL-15L) gene from zebrafish (<i>Danio rerio</i>). <i>Fish Shellfish Immunol</i> . Apr;22(4):351-62.
76.	2006 年	Naganobu K, Ohigashi Y, Akiyoshi T, Hagio M, Miyamoto T, Yamaguchi R . 2006. Lymphography of the thoracic duct by percutaneous injection of iohexol into the popliteal lymph node of dogs: experimental study and clinical application. <i>Vet Surg</i> . Jun;35(4):377-81.
77. ○	2006 年	Lan NT, Yamaguchi R , Inomata A, Furuya Y, Uchida K, Sugano S, Tateyama S. 2006. Comparative analyses of canine distemper viral isolates from clinical cases of canine distemper in vaccinated dogs. <i>Vet Microbiol</i> . Jun 15;115(1-3):32-42.
78.	2006 年	Kawabata A, Yamamoto K, Lan NT, Uchida K, Yamaguchi R , Hayashi T, Tateyama S. 2006. Establishment and characterization of a cell line, MCO-Y4, derived from canine mammary gland osteosarcoma. <i>J Vet Med Sci</i> . Oct;68(10):1047-53.
79. ○	2006 年	Lan NT, Yamaguchi R , Kawabata A, Uchida K, Kai K, Sugano S, Tateyama S. 2006. Stability of canine distemper virus (CDV) after 20 passages in Vero-DST cells expressing the receptor protein for CDV. <i>Vet Microbiol</i> . Dec 20;118(3-4):177-88.
80.	2005 年	Hasegawa T, Yoshida Y, Kosuge J, Haga T, Goto Y, Shinjo T, Uchida K, Yamaguchi R , Tateyama S, Takatori K. 2005. Subcutaneous granuloma associated with <i>Macrophomina</i> species infection in a cat. <i>Vet Rec</i> . Jan 1;156(1):23-4.
81. ○	2005 年	Yamaguchi R , Kojimoto A, Sakai H, Uchida K, Sugano S, Tateyama S. 2005. Growth characteristics of canine distemper virus

		in a new cell line CCT cells originated from canine malignant histiocytosis. J Vet Med Sci. Feb;67(2):203-6.
82. ○	2005 年	Lan NT, <u>Yamaguchi R</u> , Kai K, Uchida K, Kato A, Tateyama S. 2005. The growth profiles of three types of canine distemper virus on Vero cells expressing canine signaling lymphocyte activation molecule. J Vet Med Sci. May;67(5):491-5.
83.	2005 年	Noda S, Muroi T, Takakura S, Sakamoto S, Takatsuki M, Yamasaki K, Tateyama S, <u>Yamaguchi R</u> . 2005. Ability of the Hersberger assay protocol to detect thyroid function modulators. Arch Toxicol. Jun 10;79, 627-635.
84. ○	2005 年	Lan NT, <u>Yamaguchi R</u> , Uchida K, Sugano S, Tateyama S. 2005. Growth profiles of recent canine distemper isolates on Vero cells expressing canine signalling lymphocyte activation molecule (SLAM). J Comp Pathol. 2005 Jul;133(1):77-81.
85. ○	2005 年	Noda S, Muroi T, Takakura S, Sakamoto S, Takatsuki M, Yamasaki K, Tateyama S, <u>Yamaguchi R</u> . 2005. Preliminary evaluation of an in utero-lactation assay using 6-n-propyl-2-thiouracil. Arch Toxicol. Jul;79(7):414-21.
86. ○	2005 年	Lan NT, <u>Yamaguchi R</u> , Furuya Y, Inomata A, Ngamkala S, Naganobu K, Kai K, Mochizuki M, Kobayashi Y, Uchida K, Tateyama S. 2005. Pathogenesis and phylogenetic analyses of canine distemper virus strain 007Lm, a new isolate in dogs. Vet Microbiol. Oct 31;110(3-4):197-207.
87.	2005 年	Savan R, Aman A, Sato K, <u>Yamaguchi R</u> , Sakai M. 2005. Discovery of a new class of immunoglobulin heavy chain from fugu. Eur J Immunol. Nov;35(11):3320-31.
88.	2005 年	Kawabata A, Okano K, Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> , Hayashi T, Tateyama S. 2005. Co-localization of chondromodulin-I (ChM-I) and bone morphogenetic protein-6 (BMP-6) in myoepithelial cells of canine mammary tumors. J Vet Med Sci. Nov;67(11):1097-102.
89.	2005 年	Kai K, Yoshida M, Sugawara T, Kato M, Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S, Furuhashi K. 2005. Investigation of initial changes in the mouse olfactory epithelium following a single intravenous injection of vincristine sulphate. Toxicol Pathol. Dec;33(7):750-9.
90. ○	2004 年	Kumagai K, <u>Yamaguchi R</u> , Uchida K, Tateyama S. 2004. Lymphoid apoptosis in acute canine distemper. J Vet Med Sci. Feb;66(2):175-81.
91.	2004 年	Kai K, Satoh H, Kajimura T, Kato M, Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S, Furuhashi K. 2004. Olfactory epithelial lesions induced by various cancer chemotherapeutic agents in mice. Toxicol Pathol. Nov-Dec;32(6):701-9.
92.	2003 年	Uchida K, Nakayama H, Endo Y, Kai C, Tatewaki S, <u>Yamaguchi R</u> , Doi K, Tateyama S. 2003. Ganglioglioma in the thalamus of a puppy. J Vet Med Sci. Jan;65(1):113-5.

93.	2003 年	Uchida K, Kihara N, Hashimoto K, Nakayama H, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 2003. Age-related histological changes in the canine substantia nigra. J Vet Med Sci. Feb;65(2):179-85.
94.	2003 年	Suzuki M, Uchida K, Taniguchi K, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 2003. Peripheral neuroblastoma in a young labrador retriever. J Vet Med Sci. Feb;65(2):271-4.
95.	2003 年	Sakai H, Nakano H, <u>Yamaguchi R</u> , Yonemaru K, Yanai T, Masegi T. 2003. Establishment of a new canine cell line (CCT) originated from a cutaneous malignant histiocytosis. J Vet Med Sci. Jun;65(6):731-5.
96.	2003 年	Seki F, Ono N, <u>Yamaguchi R</u> , Yanagi Y. 2003. Efficient Isolation of Wild Strains of Canine Distemper Virus in Vero Cells Expressing Canine SLAM (CD150) and Their Adaptability to Marmoset B95a Cells. J Virol. Sep;77(18):9943-50.
97.	2003 年	Kumagai K, Uchida K, Miyamoto T, Ushigusa T, Shinohara S, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 2003. Three cases of canine gastrointestinal stromal tumors with multiple differentiations and c-kit-expression. J Vet Med Sci. Oct;65(10):1119-22.
98.	2003 年	Suzuki M, Uchida K, Morozumi M, Yanai T, Nakayama H, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 2003. A comparative pathological study on granulomatous meningoencephalomyelitis and central malignant histiocytosis in dogs. J Vet Med Sci. Dec;65(12):1319-24.
99.	2002 年	Kosuge J, Kamijo H, Shimizu Y, Goto Y, Shinjo T, <u>Yamaguchi R</u> , Sueyoshi M, Hiroii Y. 2002. Report of the first case of bovine dermatophilosis in Miyazaki prefecture. J Jpn Vet Med Assoc. Jan;55(1):9-12.
100. ○	2002 年	Noda S, Sawaki M, Shiraishi K, Yamasaki K, <u>Yamaguchi R</u> . 2002. Age-related changes of genital systems in the female Crj:CD (SD) IGS rats during sexual maturation. J Vet Med Sci. Apr;64(4):315-9.
101.	2002 年	Uchida K, Awamura Y, Nakamura T, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 2002. Thymoma and multiple thymic cysts in a dog with acquired myasthenia gravis. J Vet Med Sci. Jul;64(7):637-40.
102.	2002 年	Goto Y, Iwakiri A, Tabaru H, <u>Yamaguchi R</u> , Shinjo T. 2002. Differential diagnosis of a case of feline leprosy. J Jpn Vet Med Assoc. July;55(7):437-441.
103.	2002 年	Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 2002. Glomus tumor in the digit of a cat. Vet Pathol. Sep;39(5):590-2.
104.	2002 年	Tiwananthakorn W, Junsuwanaruk S, Sailasuta A, Rungpipat A, Techangamsuwan S, Siripornprasert S, Tateyama S, <u>Yamaguchi R</u> , Uchida K. 2002. The application of a RT-PCR technique for the diagnosis of canine distemper disease using peripheral mononuclear cells. Thai J Vet Med. 32(3):71-81.
105. ○	2001 年	<u>Yamaguchi R</u> , Tanimoto N, Tateyama S, Uchida K, Hirano N, Tsuchiya K, Shimizu H, Sugano S. 2001. Immunohistochemical study of age-dependent brain lesions in mice infected

		intracerebrally with Kasba (Chuzan) virus. J Comp Pathol. Jan;124(1):36-45.
106.	2001 年	Watanabe M, Sugano S, Imai J, Yoshida K, Onodera R, Amin MR, Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 2001. Suppression of tumourigenicity, and induction of differentiation of the canine mammary tumour cell line MCM-B2 by sodium phenylacetate. Res Vet Sci. Feb;70(1):27-32.
107.	2001 年	Murakami Y, Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 2001. Diffuse bilateral hemangiosarcoma of the uterus in a dog. J Vet Med Sci. Feb;63(2):191-3.
108.	2001 年	Uchida K, Morozumi M, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 2001. Diffuse leptomenigeal malignant histiocytosis in the brain and spinal cord of a Tibetan Terrier. Vet Pathol. Mar;38(2):219-22.
109. ○	2001 年	Okazaki Y, Yamashita K, Sudo M, Tsuchitani M, Narama I, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 2001. Neurotoxicity induced by a single oral dose of aniline in rats. J Vet Med Sci. May;63(5):539-46.
110.	2001 年	Murakami Y, Tateyama S, Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> . 2001. Immunohistochemical analysis of cyclins in canine normal testes and testicular tumors. J Vet Med Sci. Aug;63(8):909-12.
111.	2001 年	Kojimoto A, Uchida K, Horii Y, Okumura S, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 2001. Amebiasis in four ball pythons, <i>Python reginus</i> . J Vet Med Sci. Sep;63(12):1365-1368.
112. ○	2001 年	Okazaki Y, Yamashita K, Sudo M, Tsuchitani M, Narama I, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 2001. The progression and recovery of neurotoxicity induced by a single oral dose of aniline in rats. J Toxicol Pathol. Sep;14(1):19-28.
113.	2001 年	Tateyama S, Uchida K, Hidaka T, Hirao M, <u>Yamaguchi R</u> . 2001. Expression of bone morphogenetic protein-6 (BMP-6) in myoepithelial cells in canine mammary gland tumors. Vet Pathol. Nov;38(6):703-9.
114.	2000 年	Ushigusa T, Uchida K, Murakami T, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 2000. pathologic study on ocular disorders in calves in southern Kyushu, Japan. J Vet Med Sci. Feb;62(2):147-52.
115. ○	2000 年	Agungpriyono DR, <u>Yamaguchi R</u> , Uchida K, Tohya Y, Kato A, Nagai Y, Asakawa M, Tateyama S. 2000. Green fluorescent protein gene insertion of Sendai Virus infection in nude mice: possibility as an infection tracer. J Vet Med Sci. Feb;62(2):223-8.
116.	2000 年	Tateyama S, Molina HA, Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> , Manuel MF. 2000. An epizootiological survey of necropsy cases (1993-1997) at University of the Philippines. J Vet Med Sci. Apr;62(4):439-42.
117.	2000 年	Hasan MK, Kato A, Muranaka M, <u>Yamaguchi R</u> , Sakai Y, Hatano I, Tashiro M, Nagai Y. 2000. Versatility of the accessory C proteins of Sendai virus: contribution to virus assembly as an additional role. J Virol. Jun;74(12):5619-28.

118. ○	2000 年	<u>Yamaguchi R</u> , Tottori J, Uchida K, Tateyama S, Sugano S. 2000. Importance of <i>Escherichia coli</i> infection in ascites in broiler chickens shown by experimental production. Avian Dis. Jul-Sep;44(3):545-8.
119.	2000 年	Murakami Y, Tateyama S, Rungsipipat A, Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> . 2000. Immunohistochemical analysis of cyclin A, cyclin D1 and P53 in mammary tumors, squamous cell carcinomas and basal cell tumors of dogs and cats. J Vet Med Sci. Jul;62(7):743-50.
120.	2000 年	Murakami Y, Tateyama S, Rungsipipat A, Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> . 2000. Amplification of the cyclin A gene in canine and feline mammary tumors. J Vet Med Sci. Jul;62(7):783-7.
121.	2000 年	Naganobu K, Ogawa H, Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> , Ohashi F, Kubo K, Aoki M, Kuwamura M, Ogawa Y, Matsuyama K. 2000. Mast cell tumor in the nasal cavity of a dog. J Vet Med Sci. Sep;62(9):1009-11.
122.	2000 年	Watanabe M, Yoshida K, Hida M, Kato H, Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S, Sugano S. 2000. Cloning, expression analysis, and chromosomal mapping of GTPBP2, a novel member of the G protein family. Gene. Oct 3;256(1-2):51-8.
123.	2000 年	Uchida K, Murakami T, Sueyoshi M, Tsuda T, Inai K, Acorda JA, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 2000. Detection of Akabane viral antigens in spontaneous lymphohistiocytic encephalomyelitis in cattle. J Vet Diagn Invest. Nov;12(6):518-24.
124.	2000 年	Watanabe M, Tateyama S, Togashi T, Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> , Shimizu T, Sugano S. 2000. Identification of canine alpha-lactalbumin. J Vet Med Sci. Nov;62(11):1217-9.
125.	2000 年	Watanabe M, Sugano S, Togashi T, Imai J, Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 2000. Molecular cloning and phylogenetic analysis of canine beta-casein. DNA Seq. 11(3-4):295-300.
126.	2000 年	Tiwananthakorn W, Junsuwanaruk S, Rungsipipat A, Sailasuta A, Techangamsuwan S, Siripornprasert S, Tateyama S, <u>Yamaguchi R</u> , Uchida K. 2000. The diagnosis of canine distemper disease using RT-PCR. Thai J Vet Med. 30(4):26-39.
127.	2000 年	Rungsipipat A, Sailasuta A, Techangamsuwan S, Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 2000. Immunohistochemical examination of central nervous system lesions related to canine distemper virus infection. Thai J Vet Med Assoc. 51(3):49-56.
128.	2000 年	Kugi G, <u>Yamaguchi R</u> , Uchida K. 2000. Two spontaneous cases of infection with <i>Encephalitozoon</i> in rabbits. J Vet Med. 53(5):376-378.
129. ○	2000 年	<u>Yamaguchi R</u> , Kobayashi Y, Uchida K, Yoshimori R, Naganobu K, Takayama K, Takayama N, Yoshino T, Tateyama S. 2000. Evaluation of new test kits for detecting canine parvovirus antigens by means of the immunochromatography method. J Jpn Vet Med Assoc. 53(12):821-824.

130.	2000 年	Watanabe M, Tateyama S, Togashi T, Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> , Shizumu T, Sugano S. 2000. Identification of canine α -Lactalbumin. J Vet Med Sci. 62(11):1217-1219.
131.	1999 年	Rungsipipat A, Tateyama S, <u>Yamaguchi R</u> , Uchida K, Miyoshi N, Hayashi T. 1999. Immunohistochemical analysis of c-yes and c-erbB-2 oncogene products and p53 tumor suppressor protein in canine mammary tumors. J Vet Med Sci. Jan;61(1):27-32.
132.	1999 年	Agungpriyono DR, Uchida K, Tabaru H, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 1999. Subacute massive necrotizing myocarditis by canine parvovirus type 2 infection with diffuse leukoencephalomalacia in a puppy. Vet Pathol. Jan;36(1):77-80.
133.	1999 年	Rungsipipat A, Tateyama S, <u>Yamaguchi R</u> , Uchida K, Murakami Y, Miyoshi N, Hayashi T. 1999. Amplification of the c-yes oncogene in canine mammary tumors. J Vet Med Sci. Feb;61(2):185-9.
134.	1999 年	Uchida K, Muranaka M, Horii Y, Murakami N, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 1999. Non-purulent meningoencephalomyelitis of a Pacific striped dolphin (<i>Lagenorhynchus obliquidens</i>). The first evidence of morbillivirus infection in a dolphin at the Pacific Ocean around Japan. J Vet Med Sci. Feb;61(2):159-62.
135. ○	1999 年	<u>Yamaguchi R</u> , Naitoh Y, Uchida K, Hirano N, Wada T, Tateyama S. 1999. Encephalopathy in suckling mice infected with Kasba (Chuzan) virus. J Comp Pathol. Apr;120(3):247-56.
136.	1999 年	Rungsipipat A, Tateyama S, <u>Yamaguchi R</u> , Uchida K, Miyoshi N. 1999. Expression of c-yes oncogene product in various animal tissues and spontaneous canine tumours. Res Vet Sci. Jun;66(3):205-10.
137.	1999 年	Muleya JS, Nakaichi M, Taura Y, <u>Yamaguchi R</u> , Nakama S. In-vitro anti-proliferative effects of some anti-tumour drugs on feline mammary tumour cell lines. Res Vet Sci. 1999 Jun;66(3):169-74.
138.	1999 年	Uchida K, Hasegawa T, Ikeda M, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 1999. Detection of an autoantibody from Pug dogs with necrotizing encephalitis (Pug dog encephalitis). Vet Pathol. Jul;36(4):301-7.
139.	1999 年	Ushigaki K, Uchida K, Murakami T, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 1999. Multicystic renal dysplasia in a Japanese black bull. J Vet Med Sci. Jul;61(7):839-42.
140. ○	1999 年	Agungpriyono DR, <u>Yamaguchi R</u> , Tohya Y, Uchida K, Tateyama S. 1999. Pathogenicity of Sendai viruses adapted into polarized MDCK cells. J Vet Med Sci. Dec;61(12):1299-307.
141.	1999 年	Uchida K, Muranaka M, Murakami T, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. Spinal oligodendroglioma with diffuse arachnoidal dissemination in a Japanese Black heifer. J Vet Med Sci. 1999 Dec;61(12):1323-6.

142.	1999 年	Imai, J., Watanabe, M., Sasaki, M., <u>Yamaguchi, R.</u> , Tateyama, S. and Sugano, S. 1999. Induction of c-met proto-oncogene expression at the metastatic site. Clin Exp. Metastasis. 17:457-462.
143.	1999 年	Yoshida K, Hida M, Watanabe M, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S, Sugano S. 1999. cDNA cloning and chromosomal mapping of mouse BH-protocadherin. DNA Seq. 10(1):43-7.
144.	1998 年	Uchida K, Murakami T, Tometsuka T, Iwakiri A, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 1998. Peripheral neuroblastoma and primitive neuroectodermal tumor in Japanese black cattle. J Vet Med Sci. Jul;60(7):871-5.
145. ○	1998 年	Rungsipipat A, <u>Yamaguchi R</u> , Naganobu K, Iwamoto K, Uchida K, Tateyama S, Kurogi T, Katayama N. 1998. A bone tumour resembling bizarre parosteal osteochondromatous proliferation in a wallaby. Aust Vet J. Aug;76(8):561-4.
146. ○	1998 年	<u>Yamaguchi R</u> . 1998. Application and diagnostic evaluation of surgical pathology of small animal dermatoses. Jpn J Vet Res. Feb;45(4):238.
147.	1998 年	Kumamoto K, Tenjinki T, Seguchi H, Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 1998. Bovine tumors detected at Miyakonojo meat inspection office of Miyazaki prefecture during 1974-1996. J Jpn Vet Med Assoc. 51(8):449-452.
148.	1997 年	Uchida K, Kuroki K, Yoshino T, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 1997. Immunohistochemical study of constituents other than beta-protein in canine senile plaques and cerebral amyloid angiopathy. Acta Neuropathol. Mar;93(3):277-84.
149. ○	1997 年	<u>Yamaguchi R</u> , Nakaya K. 1997. Fukuoka megamouth, a probable victim of the cookies-cutter shark. In: Yano K, Morrissey JF, Yabumoto Y, Nakaya K, eds. Biology of the megamouth shark, Tokai U. Press: 171-175, figs 1-3.
150.	1997 年	Kumamoto K, Mizobe M, Seguchi H, Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 1997. Malignant mesothelioma and granulosa cell tumor in a Japanese-Black cow. J Jpn Vet Med Assoc. 50(11):667-670.
151. ○	1997 年	Tottori J, <u>Yamaguchi R</u> , Murakawa Y, Sato M, Uchida K, Tateyama S. 1997. Experimental production of ascites in broiler chickens using infectious bronchitis virus and <i>Escherichia coli</i> . Avian Dis. Jan-Mar;41(1):214-20.
152. ○	1997 年	Tottori J, <u>Yamaguchi R</u> , Murakawa Y, Sato M, Uchida K, Tateyama S. 1997. The use of feed restriction for mortality control of chickens in broiler farms. Avian Dis. Apr-Jun;41(2):433-7.
153.	1997 年	Kumamoto K, Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> , Mizobe M, Nasu H, Tateyama S. 1997. Malignant aortic body tumor in a Holstein cow. J Vet Med Sci. May;59(5):383-5.

154.	1997 年	Kuroki K, Uchida K, Kiatipattanasakul W, Nakamura S, <u>Yamaguchi R</u> , Nakayama H, Doi K, Tateyama S. 1997. Immunohistochemical detection of tau protein in various non-human animal brains. <i>Neuropathology</i> . May;17(3):174-180.
155.	1997 年	Ogawa H, Tu CH, Kagamizono H, Soki K, Inoue Y, Akatsuka H, Nagata S, Wada T, Ikeya M, Makimura S, Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> , Otsuka H. 1997. Clinical, morphologic, and biochemical characteristics of Chediak-Higashi syndrome in fifty-six Japanese black cattle. <i>Am J Vet Res</i> . Nov;58(11):1221-6.
156. ○	1996 年	Sakumi A, <u>Yamaguchi R</u> , Tottori J, Uchida K, Tateyama S. 1996. Liver capsule thickening characterized by mesothelial cell proliferation with vascularization in broilers ascites syndrome. <i>Avian Pathol</i> . Mar;25(1):147-53.
157.	1996 年	Yoshino T, Uchida K, Tateyama S, <u>Yamaguchi R</u> , Nakayama H, Goto N. 1996. A retrospective study of canine senile plaques and cerebral amyloid angiopathy. <i>Vet Pathol</i> . Mar;33(2):230-4.
158.	1996 年	Tu CH, Takahashi Y, Kaseda Y, Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> , Suzuki K, Ogawa H, Otsuka H. 1996. Inheritance of Chediak-Higashi syndrome in Japanese black cattle. <i>J Vet Med Sci</i> . Jun;58(6):501-4.
159.	1996 年	Dana D, Endo M, Iida T, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 1996. Some vitamin deficiency predisposing the granulomatous dermatitis in the fingerlings of Indonesian giant gouramy <i>Ospheronemus gouramy</i> , lacepede. <i>Jurnal Ilmu-ilmu Perairan dan Perikanan Indonesia</i> . IV(2):1-10.
160.	1996 年	Hirano N, Tawara T, Nomura R, Imai A, Ono K, <u>Yamaguchi R</u> . 1996. Sensitive plaque assay and propagation of Chuzan (Kasba) virus, a Palyam serogroup orbivirus, in BHK-21 cells. <i>J Vet Med B</i> . Aug;43(6):333-42.
161.	1996 年	Mochizuki M, Hiragi H, Sueyoshi M, Kimoto Y, Takeishi S, Horiuchi M, <u>Yamaguchi R</u> . 1996. Antigenic and genomic characteristics of parvovirus isolated from a lion (<i>Panthera leo</i>) that died of feline panleukopenia. <i>Journal of Zoo and Wildlife Medicine</i> , Sep;27(3):416-420.
162.	1996 年	Tu C-H, Ikeya M, Wada T, Goto M, Nonaka I, Mikawa K, Ito T, Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> , Murakami T, Kaseda Y, Ogawa H, Otsuka H. 1996. Bleeding disorder in Japanese black cattle with umbilical cord bleeding as a major clinical sign. <i>J Jpn Vet Med Assoc</i> . 49(4); 237-240.
163.	1995 年	Priosoeryanto BP, Tateyama S, <u>Yamaguchi R</u> , Uchida K. 1995. Antiproliferation and colony-forming inhibition activities of recombinant feline interferon (rFeIFN) on various cells in vitro. <i>Can J Vet Res</i> . Jan;59(1):67-9.
164.	1995 年	Priosoeryanto BP, Tateyama S, <u>Yamaguchi R</u> , Uchida K, Ogawa H, Nakai M. 1995. A cell line (MCA-B1) derived from a canine oral acanthomatous epulis. <i>Res Vet Sci</i> . Jan;58(1):101-2.

165.	1995 年	Uchida K, Kuroki K, Priosoeryanto BP, Kato K, Yano Y, Murakami T, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 1995. Giant cell glioblastoma in the frontal cortex of a dog. Vet Pathol. Mar;32(2):197-9.
166.	1995 年	Priosoeryanto BP, Tateyama S, <u>Yamaguchi R</u> , Uchida K. 1995. Establishment of a cell line (MCM-B2) from a benign mixed tumour of canine mammary gland. Res Vet Sci. May;58(3):272-6.
167. ○	1995 年	<u>Yamaguchi R</u> , Amos MJ, Hagio M, Tateyama S. 1995. Congenital lymphedema in a calf with lymph node dysplasia or aplasia. J Vet Med Sci. Aug;57(4):797-9.
168.	1995 年	Priosoeryanto BP, Tateyama S, <u>Yamaguchi R</u> , Uchida K. 1995. Transplantation of a cell line derived from a canine benign mixed mammary tumour into nude mice. J Comp Pathol. Nov;113(4):383-8.
169.	1995 年	Kadota K, Uchida K, Nagatomo T, Goto Y, Shinjo T, Hasegawa T, Ogawa H, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S. 1995. Granulomatous epididymitis related to <i>Rhodotorula glutinis</i> infection in a dog. Vet Pathol. Nov;32(6):716-8.
170.	1995 年	Tateyama S, Priosoeryanto BP, <u>Yamaguchi R</u> , Uchida K, Ogiwara K, Suchiya AT. 1995. In vitro growth inhibition activities of recombinant feline interferon on all lines derived from canine tumours. Res Vet Sci. Nov;59(3):275-7.
171.	1995 年	Zhao DM, Tateyama S, Miyoshi N, Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> , Yamagami T, Hayashi T. 1995. Sequence of the canine c-yes proto-oncogene. Res Vet Sci. Nov;59(3):230-3.
172.	1995 年	Uchida K, Yoshino T, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S, Kimoto Y, Nakayama H, Goto N. 1995. Senile plaques and other senile changes in the brain of an aged American black bear. Vet Pathol. 32(4):412-414.
173. ○	1995 年	鳥取潤一, <u>山口良二</u> , 作美礼乃, 高江行一, 内田和幸, 立山晉. 夏期に発生したブローラーの腹水症 1995 日本獣医師会誌 47:465-468.
174.	1994 年	Zhao D, Tateyama S, Miyoshi N, <u>Yamaguchi R</u> , Uchida K, Kai K, Priosoeryanto BP, Mina RB. 1994. Human c-yes-1-related proto-oncogene in clinically normal dogs. J Vet Med Sci. Feb;56(1):177-9.
175.	1994 年	Okuda R, Uchida K, Tateyama S, <u>Yamaguchi R</u> , Nakayama H, Goto N. 1994. The distribution of amyloid beta precursor protein in canine brain. Acta Neuropathol. 87(2):161-7.
176.	1994 年	Rostami M, Tateyama S, Uchida K, Naitou H, <u>Yamaguchi R</u> , Otsuka H. 1994. Tumors in domestic animals examined during a ten-year period (1980 to 1989) at Miyazaki University. J Vet Med Sci. Apr;56(2):403-5.
177. ○	1994 年	Zhao D, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S, Ogawa H, Yamazaki Y. 1994. Canine splenic hemangiosarcoma with abdominal dissemination. J Vet Med Sci. Aug;56(4):753-5.

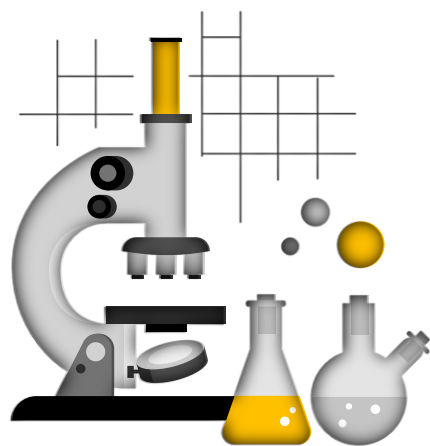
178.	1994 年	Mina RB, Tateyama S, Miyoshi N, Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> , Otsuka H. 1994. Amplification of a c-yes-1-related oncogene in canine lymphoid leukemia. J Vet Med Sci. Aug;56(4):773-4.
179.	1994 年	Mina RB, Uchida K, Sakumi A, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S, Ogawa H, Otsuka H. 1994. Mammary fibroadenoma in a young Holstein cow. J Vet Med Sci. Dec;56(6):1171-2.
180.	1993 年	Kai K, Tateyama S, Miyoshi N, <u>Yamaguchi R</u> , Uchida K, Rostami M. 1993. Proto-oncogene of genomic DNA, related to the human epidermal growth factor receptor (EGFR) gene, from clinically normal domestic animals. J Vet Med Sci. Apr;55(2):319-21.
181.	1993 年	Otonari S, Nakai M, <u>Yamaguchi R</u> , Hagio M, Nasu T. 1993. Five cases of cranial duplication in calf. J Vet Med Sci. Jun;55(3):493-5.
182.	1993 年	Uchida K, Okuda R, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S, Nakayama H, Goto N. 1993. Double-labeling immunohistochemical studies on canine senile plaques and cerebral amyloid angiopathy. J Vet Med Sci. Aug;55(4):637-42.
183. ○	1993 年	Zhao D, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S, Yamazaki Y, Ogawa H. 1993. Bilateral renal lymphosarcoma in a dog. J Vet Med Sci. Aug;55(4):657-9.
184.	1993 年	Uchida K, Tateyama S, <u>Yamaguchi R</u> , Rostami M, Kadota K, Hasegawa T, Ogawa H, Kuroki A. 1993. Eosinophilic meningitis in two cows. J Vet Med Sci. Dec;55(6):1071-2.
185.	1993 年	Ito T, Tateyama S, Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> , Ashizawa K. 1993. Attempt to culture pluripotent cells from early chick embryo. 宮大農報. 40:71-81.
186.	1993 年	Sailasuta A, Tssaprateep T, Sunyasootcharee B, Tateyama S, <u>Yamaguchi R</u> , Nosaka D, Miyashi N. 1993. Proto-oncogenes of genomic DNA in normal Thai domestic animals. Thai J.Vet.Med. May;20(4):553-567.
187.	1992 年	Prioeryanto BP, <u>Yamaguchi R</u> , Tateyama S, Matsuyama K. 1992. Microscopical and immunohistochemical studies on intestinal signet-ring cell and pulmonary bronchiolar-alveolar carcinoma in a cat. Indonesian J Vet Sci. 75(2):57-69.
188.	1992 年	Ikeda T, Tateyama S, Uchida K, <u>Yamaguchi R</u> . 1992. Culture of chick embryos from laying to hatching using recipient shells. Bull. Fac. Agriculture Miyazaki Uni. 39(1):49-55.
189.	1992 年	Murakami T, Yoshida A, <u>Yamaguchi R</u> . 1992. Congenital portosystemic shunt in a calf Adv. Anim. Cardiol. 25(1.2)9-12.
190.	1991 年	Mutoh Y, Tateyama S, <u>Yamaguchi R</u> , Sunyasootcharee B, Tesaprateep T, Sailasuta A. 1991. Retrospective study of Aujeszky's disease in pig in Thailand using immunohistochemical methods. Thai J Vet Med. 20(4):553-567.
191.	1991 年	Yamasaki Y, Makimura S, <u>Yamaguchi R</u> , Usui M. 1991. Evaluation of enzyme- Linked immunoabsorbent assay for serodiagnosis of

		Theileria sergenti infection in cattle. Bull. Fac. Agriculture Miyazaki Uni. 37(2):357-367.
192.	1991 年	Sunyasootcharee B, Tesapratchee T, Sailasuta A, Mutoh Y, Tateyama S, Yamaguchi R . 1991. Application of the immunohistochemical method for detection of Aujeszky's disease virus infection in the field cases of hog cholera in Thailand. Thai J Vet Med. 21(1):27-34.
193.	1991 年	Miyoshi N, Tateyama S, Ogawa K, Yamaguchi R , Kuroda H, Yasuda N, Shimizu T. 1991. Abnormal structure of the canine oncogene, related to the human c-myc-1 oncogene, in canine mammary tumor tissue. Am J Vet Res. Dec;52(12):2046-9.
194.	1991 年	Sailasuta A, Tateyama S, Yamaguchi R , Yamauchi K, Ohashi T, Katayama H. 1991. Culture of mammary epithelial cells from bovine milk. III. Milk synthesis by co-culture with mammary fibroblasts in collagen gel. J Dairy Sci (Japanese Journal of Dairy and Food Science). 40(5):A-227-A234.
195.	1991 年	Makimura S, Kinjo H, Matvelo JA, Ogawa H, Yamaguchi R , Tateyama S, Yamasaki K, Matsuyama K, Usui M. 1991. Three cases of Hepatozoon canis infection of dogs in Miyazaki Prefecture. J Jpn Vet Med Assoc. 44(9):928-932.
196.	1990 年	Tateyama S, Takeshita A, Nosaka D, Yamaguchi R , Miyoshi N, Kondo F. 1990. Tissue culture of feline normal mammary gland. Jpn J Vet Sci. Feb;52(1):137-43.
197.	1990 年	Tateyama S, Furukawa H, Yamaguchi R , Nosaka D, Kondo F. 1990. Plate and collagen-gel cultures of normal canine mammary epithelial cells. Res Vet Sci. Jul;49(1):14-9.
198.	1990 年	Tateyama S, Yamaguchi R , Uchida K, Nosaka D, Murakami T, Otsuka H. 1990. An outbreak of congenital hydranencephaly and cerebellar hypoplasia among calves in South Kyushu, Japan: a pathological study. Res Vet Sci. Sep;49(2):127-31.
199. ○	1989 年	Yamaguchi R , Iwai H, Ueda K. 1989. Antigenic variation among Sendai virus strains detected by monoclonal antibodies. Microbiol Immunol. 33(2):133-9.
200.	1989 年	Tanimura N, Tateyama S, Yamaguchi R , Nosaka D. 1989. Immunohistochemical demonstration of somatostatin-containing cells in the equine thyroid and parathyroid glands. Jpn J Vet Sci. Feb;51(1):228-30.
201.	1989 年	Sailasuta A, Tateyama S, Yamaguchi R , Nosaka D, Otsuka H. 1989. Adenomatous papilloma of the uterine tube (oviduct) fimbriae in a dog. J Jpn Vet Med Assoc. Jun;51(3):632-3.
202.	1989 年	Sailasuta A, Tateyama S, Mutoh Y, Yamaguchi R , Nosaka D, Matsuyama K. 1989. Tissue culture and immunohistochemical study of oviduct tumor in a dog. Thai J Vet Med. 19(2):83-96.
203.	1989 年	Sailasuta A, Tateyama S, Mutoh Y, Yamaguchi R , Nosaka D. 1989. Plate culture of canine metastatic sertoli cell tumors. Thai J Vet Med. 119(4):229-233.

204. ○	1988 年	Yamaguchi R. , Iwai H, Ueda K. 1988. Variation of virulence and other properties among Sendai virus strains. Microbiol Immunol. 32(2):235-40.
205.	1988 年	Sailasuta A, Tateyama S, Okazaki Y, Nosaka D, Yamaguchi R. 1988. The immunohistochemical demonstration on bovine ocular squamous cell carcinoma. Thai J Vet Med. 18(4):355-360.
206.	1988 年	Tateyama S, Tanimura N, Moritomo Y, Monji K, Yamaguchi R. , Nosaka D, Cotchin E. 1988. The ultimobranchial remnant and its hyperplasia or adenoma in equine thyroid gland. Jpn J Vet Sci. Jun;50(3):714-22.
207.	1988 年	Tateyama S, Shibata I, Yamaguchi R. , Nosaka D, Ashizawa H. 1988. Participation of myofibroblasts in feline mammary carcinoma. Jpn J Vet Sci. Oct;50(5):1048-54.
208.	1988 年	Tateyama S, Kawano A, Yamaguchi R. , Nosaka D, Kondo F. 1988. Culture conditions and cell morphology of goat milk-derived mammary epithelial cells in plate culture. Jpn J Vet Sci. Dec;50(6):1192-9.
209.	1988 年	Kawano A, Tateyama S, Yamaguchi R. , Nosaka D, Kondo F. 1988. Morphology of goat milk-derived mammary epithelial cells cultured in collagen gel. Jpn J Vet Sci. Dec;50(6):1252-8.
210.	1986 年	Tanimura N, Tateyama S, Nosaka D, Moritomo Y, Yamaguchi R. 1986. Immunohistochemical and electron microscopical detection of parafollicular (C) cells in equine parathyroid glands. Jpn J Vet Sci. Feb;48(1):45-52.
211.	1986 年	津野健一郎, 立山 晋, 野坂 大, <u>山口良二</u> , 仲村和夫, 萩尾光美. 双子仔牛に発生した仔牛型白血病 日獣会誌 39:320-324. 1986 年.
212.	1986 年	立山 晋, 野坂 大, 芦沢広三, 大塚宏光, 和田浩二, <u>山口良二</u> . 1970 年から 1979 年までの 10 年間に宮崎大学家畜病理学研究室で検索した動物の腫瘍 日獣会誌 39:242-247. 1986 年.
213.	1986 年	古川英幸, 立山 晋, 萩尾光美, <u>山口良二</u> , 野坂 大. 子牛における寛骨の形成異常 25 例 日獣会誌 39:320-324. 1986 年.
214.	1986 年	萩尾光美, 村上隆之, <u>山口良二</u> , 杜杰憲, 山口 徹, 福島敬之. 大塚宏光子牛の水無脳症および水頭症の超音波診断 宮大農報 33(1):73-84. 1986 年
215.	1985 年	森友靖生, 芦沢広三, 立山 晋, <u>山口良二</u> , 野坂 大. ウマの甲状腺および上皮小体における C 細胞の分布について 九州東海大学農学部紀要 4:75-81. 1985 年.
216. ○	1985 年	Yamaguchi R. , Iwai H, Otsuka Y, Yamamoto S, Ueda K, Usui M, Taniguchi Y, Matsuhashi T. 1985. Conjugation of Sendai virus with pullulan and immunopotency of the conjugated virus. Microbiol Immunol. 29(2):163-8.

217.	1984 年	Iwai H, Yamaguchi R , Otsuka Y, Ueda K, Saito M. 1984. Immunoglobulin classes of anti-Sendai virus antibody detected by ELISA in infected nude mouse serum. Microbiol Immunol. 28(4):481-91.
218.	1984 年	Nerome K, Shibata M, Kobayashi S, Yamaguchi R , Yoshioka Y, Ishida M, Oya A. 1984. Immunological and genomic analyses of two serotypes of avian paramyxovirus isolated from wild ducks in Japan. J Virol. May;50(2):649-53.
219. ○	1982 年	Yamaguchi R , Taguchi F, Yamada A, Utsumi K, Fujiwara K. 1982. Pathogenicity of sialodacryoadenitis virus for rats after brain passages in suckling mice. Jpn J Exp Med. Feb;52(1):45-8.
220.	1981 年	Taguchi F, Yamaguchi R , Makino S, Fujiwara K. 1981. Correlation between growth potential of mouse hepatitis viruses in macrophages and their virulence for mice. Infect Immun. Dec;34(3):1059-61.
221.	1979 年	芦沢広三, 野坂 大, 立山 晋, 薄井萬平, 村上隆之, 黒木利八, <u>山口良二</u> . ドロレス顎口虫の寄生によるイノシシ胃壁の病変について. 第2報 病理組織学的所見 宮大農報 26:279-290. 1979 年.
222.	1979 年	芦沢広三, 野坂 大, 立山 晋, 薄井萬平, 村上隆之, 黒木利八, <u>山口良二</u> . ドロレス顎口虫の寄生によるイノシシ胃壁の病変について. 第1報 肉眼的所見 宮大農報 26: 267-277. 1979 年.
No.	発表年 (西暦)	プロシーディング・その他
1.	2000 年	長谷川貴史, 横田和彰, <u>山口良二</u> . 胃穿孔の犬の一例. 獣医麻酔外科学雑誌. 31, 54, 2000 年.
2.	1994 年	Kanasugi H, Inomata T, Naganobu K, Ogawa H, Uchida K, Yamaguchi R , Taura Y, Nakaichi M, Kubo K, Shimada T, Ohashi F, Katuyama A, Matsuyama K, Hasegawa T. 1996. Recombinant human granulocyte colony-stimulating factor (rhG-CSF) augments lymphocyte blast transformation in three tumor bearing dogs [in Japanese]. Journal of Animal Clinical Research Foundation. April;4(2): 17-23.
3. ○	1990 年	Yamaguchi R , Akaishi T, Tateyama S, Nosaka D, Kawagoe Y. 1990. Congenital anomalies of newborn calves associated with vitamin A deficiency. Proc. 7th FAVA Cong. 250-257.
4.	1990 年	Sunyasootcharee B, Tesaprateep T, Sailasuta A, Tateyama S, Yamaguchi R , Miyoshi N. 1990. Preliminary survey on protooncogenes in normal Thai domestic animals. Proc. 7th FAVA Cong. 325-332.
5.	1990 年	Tateyama S, Furukawa H, Yamaguchi R , Nosaka D, Otsuka H, Sasaki N. 1990. Plate and collagen gel culture of neoplastic canine mammary epithelial cells. Proc. 7th FAVA Cong. 622-634.

6.	1988 年	熊谷丑二, 今井康仁, <u>山口良二</u> , 大塚宏光. 犬の乳房切除後の皮膚形成術 小動物臨床 7(1):70-80. 1988 年.
7.	1988 年	Kondo F, <u>Yamaguchi R</u> . 1988. Detection of tetracyclines by using a thin layer electrophoretic method. Food Hygiene and Safety Science (Shokuhin Eiseigaku Zasshi). 29 (39):185-191.
8.	1986 年	Tateyama S, Nosaka D, <u>Yamaguchi R</u> . 1986. Tumors in domestic animals studied during a ten-year period from 1975 to 1984 at the Department of Veterinary Pathology, Miyazaki University. Proc. 5th FAVA Cong. 170-175.
9.	1984 年	Tateyama S, Shibata T, Nosaka D, <u>Yamaguchi R</u> . 1984. Myofibroblast in Feline Mammary Tumors: Light and Electron Microscopic Study. Proc. 4th FAVA Cong. 211-217.
10.	1984 年	熊谷丑二, 国分賢二, 江副洋二郎, 西村真一, <u>山口良二</u> , 立山 晋, 大塚 (宮大), 古内一郎, 木谷孔保, 島内均 (独協医大耳鼻咽喉科). 11. ブロカスマ・ベルナのネビュライザー投与における安全性に関する研究 第 8 回医用エアロゾル研究会報告 48-52. 1984 年.



家畜病理学講座（研究室）（現獣医病理学研究室）



当講座は高農・農専時代の家畜病理学・家畜寄生虫病学・胎生学・家畜組織学を中心とした研究室に源を発している。

昭和13年4月、獣医科創設の際の学科専任教官は高農創立時から勤務された河野成助教授（大14.3～昭34.3）ただ1名であったが、同10月、新たに学科教官として赴任した関口雄司助教授（昭13.10～17.5）により、本学における初めての家畜病理学の講義が開始された。関口助教授は、病理学総論、病理解剖学・同実習のほか細菌及び免疫学・同実習をも兼任しながら、獣医学科の最初の実験研究棟である獣医実験室（鏡検室・教官研究室・細菌実習室）や病理解剖室の設計に努力され、それらは昭和15年1月に竣工した。しかし戦争は関口助教授をして、この新しい研究棟で研究活動に就くことを許さず、間もなく応召により戦場へ赴かれ、昭和17年5月、壮烈な戦死を遂げられた。歴代の数多くの学科教官中、ただ一人の戦死者である。

関口助教授出征中の家畜病理学の講義は、昭和15年に着任した年若き井上廉教授（昭15.4～34.7）が引き継ぐことになった。井上教授は、もともと専攻が家畜胎生学・組織学で、前任地の農林省種畜牧場での経験から寄生動物学にも深い関心を持っていた。新築成った教官研究室で家畜病理学の本格的な研究活動が開始されたのは、この井上教授着任からであった。井上教授は「わが国におけるめん羊の内部寄生虫に関する研究」のテーマで文部省科学研究費の補助を受け、（昭16～18）学内動物舎で多数のめん羊を飼育するとともに、住吉牧場や別府市郊外城島高原の鐘ヶ淵紡績会社のめん羊牧場にも出向いて、めん羊の寄生虫病関係の研究に取り組んだ。多くの備品類の購入も、この科学研究費に負うところが少なく、それらは当時としては珍しかった電気高低恒温器、自記地中温度計、万能投映機など、研究用だけでなく教育上にも大いに役立つものであった。当時の専攻学生中、先生の研究を手伝うため、重い顕微鏡や手回し遠心分離機をリュックにつめて調査旅行に同行し、「灯下管制」下の薄暗い電灯の下で、井上教授と寄生虫卵検査や虫種同定の作業に従事したものが少なくない。教育面でも井上教授の講義は斬新で、多くの学生を魅了した。実習では特に顕微鏡の取扱いや観察に力点がおかれ、学生に対し徹底的な修練を実施したため、本学卒業生は「顕微鏡に強い」との評判を得ている。一方、開拓獣医依託生を引率して旧満州国（現中国東北地区）の各地へ実習旅行に赴くなど、常に活動的で、当時現地で採取された貴重な病理標本類が、現在も学科標本展示室に保存され、学生の教材に利用されている。昭和18年に大原周次助教授（昭18.3～22.7）を迎え、ここに研究室は教官2名となり、研究室の体裁が整った。しかし大原助教授は昭和19年2月から21年6月まで応召、その間を中沢美登助教授（昭19.7～21.5）が就任した。当時は現在のようにはっきりした講座制ではなく、学科の数少ない教官がそれぞれ得意の科目を担当していた関係で、教官ごとの研究室といった感があり、家畜病理学を中心とした当研究室は大学移行まで「井上研究室」と呼び習わ

されていた。井上教授、大原・中沢助教授は、家畜病理学、組織学、胎生学、寄生動物学・同実験、病理解剖実習を担当した。この時代に日高功技術員（昭 16.3～18.2）と井上仲子（昭 19.2～20.7）、日高美代子（昭 19.1～21.11）の各事務補佐員らが井上・大原・中沢の各教官を助けた。病理解剖実習は高鍋町にあった軍馬補充部から病馬発生（ほとんど伝染性貧血症）の通報に接すると、払い下げを受けるため学生が当番で馬具を背負ってバスで現地に赴き、夜の高鍋・宮崎街道（現在の国道 10 号線）を、あるいは騎乗し、あるいは手綱を引きながら明け方の学校に到着、直ちに解剖実習を始めるという状況であった。そのような関係で実習材料には割と恵まれていた。

昭和 20 年 8 月終戦とともに住宅難や食料の不足は極限に達した。この混乱期に多くの教官が家庭の事情等により郷里へ引揚げざるを得なくなり、中沢助教授、大原助教授も退官された。その間、卒業生である藤崎哲夫助手（昭 18.10 研修生～21.1、21.2 助手～21.7）吉野正男研究員（昭 19.10～20.1）、長谷川百利助手（昭 20.12～21.2）、青木需助手（昭 20.12～21.2）中原俊明助手（昭 22.2～22.5）が井上教授を助けた。井上教授のご一家は学内の、それまで研究用めん羊を飼育していた動物舎を改装して住宅に当てられ、そこへ移り住んだ。当時、新任の本学教官で住宅の確保ができず、学内の種々の施設を仮住居として不自由な生活を余儀なくされた人は多い。昭和 24 年、それまで空席であった助教授席に野坂大（昭 24.4～現在）が就任するに及んで、病理学研究室は戦後期を迎えるに至った。この時期は、実験・研究用の家畜も少なく、研究費もまた至って乏しく、まことに苦しい時代であった。しかしまたま、宮崎地方に毛皮用の家兎飼育熱が盛んとなり、子兎の疾病としてコクシジウム症が多発したので、研究室は「家兎コクシジウム症病理に関する実験的研究」で文部省科研費の補助を受け研究を開始した。この時期にコクシジウム症、スピロヘータ症、耳疥癬症、腸サルモネラ症、異常分娩など、家兎についての一連の研究成果を発表した。一方、鶏の伝染性下痢症の発生もあり、その病理学的研究から、鶏の単球増多症と下痢症との関連、鶏の血液学的基礎研究、鶏白血病についての研究など鶏血液病に関する研究についても報告した。この頃から本格的に専攻学生が当研究室に入室するようになったが、それら専攻学生は教官の研究を助けるため、朝露を踏んで実験兎に与える飼料用の草刈りを行なった。研究室の一隅に手製のベッドを持ち込んで夜間の観察・監視に当るなど、古い専攻学生には思い出が尽きない。当講座の専攻学生はその後も跡をたたず、その数は計 111 名（昭和 49 年 11 月現在）にのぼっている。講座における多くの研究はこれら専攻学生の援助と協力に負うところが大きい、きびしい研究体験をした専攻学生の多くは、その経験を生かして現在各分野で華々しい活躍をしている。

昭和 24 年、母校が新制大学へと発展するに伴い当研究室は従来の伝統を引き継いで家畜病理学講座として発足した。

大学への移行は決してすべてが順調に進んだわけではなく、当講座も学部・学科とともにこの変革期の大波をまともにかぶらざるを得なかった。そのため井上教授の苦労は決して小さくはなかった。井上教授は寄生動物学を担当していた関係で病理学講座のほかの家畜

衛生学講座の主任教授をも兼任することになった。たまたま、宮崎県種禽場が付属住吉牧場の敷地を借用して設立された関係もあって、県との共同研究で鶏病の調査・診断・予防、甘藷養鶏の体質・耐病性の試験研究が続けられ、また、同場の死亡鶏のほとんどが当研究室に持ち込まれて解剖に付された。教育面で大学移行後の10年間ほどは、井上・野坂両教官で病理学のほか寄生虫学、組織学、衛生学、発生学、繁殖学と、さらにそれらの実験実習を担当し、現在では到底考えられない過重負担の状態であった。この間にあって、井上・野坂両教官をいろいろの面で助けた、満尾富美子（昭23.5～25.8）、和田洋子（昭25.8～31.3）の両研究補佐員、塚野皓一研究員（昭26.7～26.12）、坂本信雄技術員（昭31.1～31.10）、三村二雄講師（昭31.11～37.5）、玉田省吾研究員（昭34.4～34.12）の尽力と努力を忘れることはできない。教育・研究に、学会活動に、また学内管理運営にと超人的活躍をした井上教授は、過労もたたって昭和34年7月26日、胆石症のため急逝された。講座にとっても学科・学部にとっても、まことに惜しい人材を失い極めて大きい損失であった。

しかし、翌昭和35年、井上教授の後任として兵庫県衛生研究所獣医部長であった芦沢広三教授（昭35.12～昭56.3）が着任して講座の発展期を迎えることができた。芦沢教授の専攻は寄生虫病理学であり、兵庫県時代に学位論文としてまとめた反すう家畜の肝蛭性気管支拡張症の研究は、それまであまり承認されていなかった肝蛭の異所寄生に基づく肺病変を多くの事例を挙げて実証した業績である。同教授は着任以来、同症の畜牛における臨床例を追究し、続いて豚・兎・馬の肝蛭症、牛やめん・山羊の双口吸虫症、豚の顎口虫症、各家畜の肝吸虫症や脾吸虫症など多くの寄生虫病理学的研究の成果を報告した。その間、大里克夫講師（昭37.4～42.3）、山口浩助手（昭42.4～45.4）が芦沢・野坂両教官を助け、野坂助教授は牛脾蛭症の研究で昭和45年、東京大学から学位を受けた。昭和45年、東京大学院博士課程を修了した立山晋助手（昭45.7～平成19.3）が着任し、芦沢・野坂・立山3教官のスタッフで、引き続き多くの研究を手掛けるとともに当地方で産業上問題視されている豚胃潰瘍症、育成牛の流行性肺炎、未經産牛乳房炎などの疾病についても学科内の他講座教官と共同して追究し、病性の解明に当った。立山晋助手は、昭和48年11月から2ヵ年間、英国ロンドンの王室獣医大学にて、家畜の腫瘍について勉学に励まれ、帰国後当講座における腫瘍の研究にあたられた。

昭和56年7月に野坂助教授は教授に昇任した。それまで悪戦苦闘してきた研究室の講義・実習は病理に集中できるようになり、研究については同研究室のこれまでの研究テーマを踏襲した。牛の病理学的研究、小動物の病理学的研究を継続し、特に搬入される自然例を病理の症例として大事にした。特に、臓器の写真撮影には妥協を許さず、右に1度傾くと悩まれ、左に1度傾くとバランスを気にし、背景に光が当たると蛍光灯を消し、常に美しい映像を求めた。1台目で撮影したネガフィルムを現像して印画紙に焼き、白黒スライドも作成し、さらに、2台目ではスライド用ポジフィルムで撮影され、写真技術は後生の学生にまで受け継がれ、各方面でその技術は生かされた。現在では印画紙に写真を焼く専門家さえ少なくなったが、この技術を伝授され助けられた卒業生は多い。野坂は学生の自由なる発想や積

極性を大事にし、学生から申請された研究テーマに関しても相談の上、甘受した。盛んに行ったルーチンワークの病理解剖や病理学実習の解剖後の後処理は旧船塚キャンパスでは埋葬するしかなかったので、後処理の際には穴掘りから開始せざるを得なかった。夏の暑い日も、冬の寒い日も穴掘りがあったのは、数多くの学生の記憶に残っていることと思う。とはいえ、精一杯埋葬したこれらの検体も移転後は一つ残らず丁寧に掘り起こして供養し、焼却処分を業者に委託された。当大学出身の学生の解剖技術はどこでも評価され、絶賛された。特に牛の脳脊髄摘出は当教室の得意とするところであった。野坂教授の教育に対する熱心さは多くの卒業生が知るところだったが、それは勉学にのみにとどまらなかった。当時、毎年恒例で伝統的催事として「学科対抗運動会」があった。野坂教授は夜遅くまで準備や練習をしている学生のために、サーチライトまで準備され、暗くなると病理学研究室の廊下の窓から馬場に向かって明々と照らして頂いた。また、午後1時から始まる病理解剖学実習も、暗くなるまで行われたが、熱心に教授された。勤しむ学生を気遣い一定の休憩時間を学生に与え、あたりは暗くなり病理解剖室の電灯のみが煌々とした中、夕食をとる学生もいた。野坂は教育・研究に費やす時間は膨大で、昼と夜の分の2つの弁当を持参していたことは有名である。これほどまでに病理の講義・実習を大事にし、労力を惜しまなかったのは、これまでやってきた病理以外の多くの講義実習のノルマから解放された反動であろうと推察される。日本の小動物ブームで獣医は産業動物より小動物に注目がおかれ、いつしか、産業動物を研究する大学は日本で少なくなり、1-3大学だけになった。その大学もいつやめるかという話もあった。が、宮崎大学は伝統的に産業動物の研究を行っており、その命脈がいき続けている。

病理学研究室には伝統的に留学生が多いことを特色としているが、野坂教授が最初に台湾（現在の屏東科技大）からの留学生である呉永恵氏を受け入れたことはあまり知られていない。その功績から屏東科技大のキャンパス移転の際にアドバイザーとして助言を求められ、台湾へ赴いており、小さなキャンパスから現在の科技大の大キャンパスになったことに大きな影響を与えたとされる。また、講義の際の話術も有名であり、野坂教授が盛んに話された、東大の「ヤンソン先生」の功績話は耳から離れない。

野坂教授は自然例を研究材料として重んじた。特に牛の異常産、とりわけ子牛の水頭無脳および関節湾曲を示すアカバネ病が宮崎、鹿児島で当時大流行し、当研究室には処理場のように入検体が幾度となく搬入された。しかし、多くの検体を解剖したにもかかわらず、病変は原因が消失した後の変化ばかりであったため、長い間、原因不明で、不可解な疾病であった。経済損失が大きかったこともあり大臣が状況説明の国会で答弁する際、野坂教授が後ろに控えておられたと聞いている。

立山晋は昭和56年9月助教授に昇任し、平成2年4月に教授に就任した。それまでの経歴は宮崎大学の当教室卒業後、東京大学院博士課程家畜病理学教室に進学し、勉学後、当教室に戻った。まもなくイギリスの腫瘍病理で著名なコチン教授に師事し、帰国後も積極的に動物の腫瘍病理学的の研究に取り組んだ。特に犬の乳腺腫瘍に興味を持たれ、未だに議論が

続きその特徴的に形成される骨・軟骨の由来について各種手法を用いて研究した。連続切片により筋上皮細胞と骨軟骨形成との関連をしきりと調べられた。日本で動物分野の腫瘍病理といえば立山と言われるほどであった。船塚キャンパスの旧校舎で組織培養室を手作りして、多くの獣医関係者に先んじて組織培養、すなわち乳腺の細胞培養を行った。当時の獣医学では最先端の技術であった。産業動物の腫瘍についても多くの実績を残している。また、実家で牛や鳥などを飼育し、田んぼとともに農業を実践していたのは立山教授ならではのことであり、教育現場でも、その経験が活かされたことと推測している。それだけではなく、立山教授はかねてより日本の獣医学教育体制に危機感を覚えておられ、その策動により九大案の実現まであと一歩まで近づいたが、スクラップアンドビルド方式で他大学の合意を得ながら、他大学から最後の協力が得られなかったのは痛恨の極みであった。当教室から多くの人材を輩出してきた。当大学における解剖村上教授（退職）、微生物後藤教授、獣医病理学山口教授、産業動物衛生学末吉教授、産業動物疫学乗峰教授のみならず、山口大学故林教授（東大在職中、助手、山口大学助教授）、岐阜大学柳井教授（現加計学園教授）、鹿児島大学三好教授、東京大学内田准教授、大阪府立大学長谷川教授など多くの大学教員が当教室出身である。これら人材を輩出する土壌を病理学という専門性や歴史的背景を基に当研究室の歴代の教授たちが作ってきたといえよう。

各専門分野が細分化して分子生物学の技術が進化していく中で、旧態依然のまま HE 染色で診断していた病理学にも免疫組織化学的な検査技術が加わってきたことにより病理診断の格段の進歩を迎えることになった。そのことは山口教授が東京大学大学院生であった頃、1980 年から医科学研究所で細胞培養を用いて実施されていたが、組織標本では凍結切片を用いる必要があり、一般の病理診断に普及してはいなかった。その頃、立山教授は腫瘍の研究に分子生物学的手法を導入することで、犬の癌遺伝子の解明をすすめ、日本におけるパイオニアとなった。犬の腫瘍の発生に関与する遺伝子について研究を行ってきただけではなく、犬の腫瘍の組織培養も手がけ、腫瘍細胞の株化を数多く試みた。

昭和 59 年(1984 年)1 月に山口良二は助手として着任した。山口助手も当研究室の卒業生であり、さらに東京大学院修士課程終了後、博士課程に進学した。医学、薬学、理学、農学系など多様な研究者が研究している東京大学医科学研究所に院生として配属され、研鑽を積んだ。その後、昭和 56 年 4 月に厚生省国立公衆衛生院獣医学研究部人獣共通伝染病室厚生技官として研究職についた後、宮崎大学に着任した。東京大学医科学研究所ではウイルス感染症の研究、特に、実験動物のコロナウイルス感染症の研究を行ってきた。2012 年～2014 年に日本で大流行する豚流行性下痢 PED と同科のウイルスであるマウス肝炎ウイルス MHV と、パラミクソウイルスであるセンダイウイルスの研究を行い、「センダイウイルス感染症に関する研究」で東京大学から農学博士の学位を授与された。その後、米国コーネル大学に留学して、帰国後も山口助手のこの経験は活かされ自然例の病理診断を多く見てきた。宮崎大学の病理診断力は飛躍的に向上した。

平成3年3月、山口は助教授に昇任、平成19年4月に教授に就任した。1990年（平成2年）から2000年（平成12年）、感染症の多くはワクチンと抗生物質で解決できる時代になったと理解され、感染症の研究テーマは乏しいと思われた。感染症は医科学研究所時代多くの研究者が手がけており、その後の研究テーマがないというのは自然発生しても問題にならない世の中の状況だったからである。Covid-19流行でコロナ禍となっている今では信じがたいことであるが、また、それまでも、エボラ、SARS（重症急性呼吸器症候群）、ウエストナイル熱、エボラ出血熱、クリミア・コンゴ出血熱、後天性免疫不全症候群（HIV）、重症熱性血小板減少症候群（SFTS）、バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌（VRSA）、ジカウイルス、MERS、デング熱、口蹄疫、高病原性鳥インフルエンザ、高病原性豚繁殖呼吸障害症候群（HPPRRS）等が新興再興感染症としてみられ、問題となってきた。しかしその当時、細菌学者である微生物の後藤教授がほとんど研究テーマとなるものがなくなったと会話していたのは1990年～2000年の頃だと記憶している。

しかし、山口教授は腫瘍診断のみならずあえて、イヌジステンパーウイルス（CDV）の研究にも力を入れた。形態診断の面白さを腫瘍と感染症に求め、病理学の思考する部分を楽しんだ。平成13年（2001年）に山口が助教授であった頃イギリスのパープライト研究所、スイスのベルン大学、米国のコーネル大学で在外研究を行っており、感染症、分子学的手法、神経病理学を学び帰国した。生涯の研究と位置づけたCDVは日本での発症例は少なくなったが、世界ではありふれた感染症であった。それがアザラシ、イルカ、ライオン、トラにまで感染するようになり、一時期はサルに感染することでヒトと同じウイルス受容体を持つのではないかと心配された。しかし、分離と定量、中和反応の可能な優れた感受性細胞株が存在しなかったためCDVの研究が思うように進まなかった。そこで、山口教授は以前から始めていたCDV受容体発現感受性細胞の発現に力を注ぎ、世界で初めてCDV受容体であるイヌSLAM発現細胞を作成し、研究に革新をもたらした。さらに、教授になってからの研究で、上皮細胞にも別のCDV受容体ネクチン4を発現して、同属のCDVが犬に脳炎を示すことの証明を行った。この受容体は犬の神経細胞に発現し、ヒトやサルの脳には発現しておらず、この事がヒトの麻疹を代表とするモルビリウイルス感染が一般に脳炎を示さないことの説明となった。加えて、ブロイラー腹水症についても研究を重ねた。年々品種改良によりブロイラーは大きくなって筋肉量が増す。その一方鶏の肺は肋骨で容量が制限されているので、不断給餌による過食で食事に対してその分酸素を要求する分を供給するのに限界がある。ブロイラーの筋肉増量の改良が酸素不足となり、低酸素症となって抵抗力が落ち感染症を引き起こしやすくなる。その目安として成長ある時期に呼吸器症状が現れるが、多くは大腸菌によることが実験によってわかった。そのために循環障害がおこり、心臓では肺性心が見られ、腹水症は以上のことが原因であることを突き止めた。それに留まらずその解決策まで提唱し、現場の飼育方法は不断給餌から制限給餌へと一変し、現在も引き続き実施されている。宮崎大学が主な研究対象として産業動物を志向していく中、豚の疾病についての研究にも力を注ぎ、豚繁殖呼吸障害症候群（PRRS）、豚下痢症（PED）、豚熱（CSF）、アフリカ豚熱（ASF）

の研究を続けている。

その間、平成3年10月に内田助手が着任した。内田助手は当研究室を卒業後、東京大学家畜病理学教室に進学し、博士課程修了後平成2年4月より、東京大学の助手を務めた後宮崎大学に着任した。その後平成6年に米国コーネル大学に留学して研鑽を積んだ。帰国後当教室で診断に勤しんで、宮崎では入手困難である脳神経系の疾病の病理学的研究を臨床の専門家と組んで行った。内田助手の業績は日本の獣医病理では高い評価を受け、大学の改革に伴い、助手席を輩出することになると同時に、平成20年1月に東京大学獣医病理学研究室の准教授に就任し、その後教授になるものと思われる。当教室卒業生の中でも内田准教授の活躍にはめざましいものがある。現在(令和4年3月)、日本獣医病理専門家委員会 JCVP の理事長をしている。

当研究室の特色である国際交流については、野坂教授の台湾屏東科技大の呉銘芳氏、シリアのアスクルディワファ氏から始まり、それに引き続き立山教授はタイ・チュラロンコーン大学からアチャリア・サイラスータ氏(タイ・獣医師会会長)、中国農業大学から趙徳明氏(中国病理専門家協会会長)、インドネシア・ボゴール農業大学からバンバン氏を受け入れ、国際色を豊かにしていった。呉銘芳氏からは、野坂・立山・山口の3人体制で留学生の面倒を見た。立山教授は国際交流に熱心であり、各アジアでトップレベル大学と国際交流協定を結ぶことに余念がなかった。この頃は大学間交流について大学からのバックアップもなく、個人の予算(私費のこともあった)を費やすことも多かった。その頃、山口助教授も交流協定締結に同伴した。締結するとすぐ5大学の担当の分担を行った。タイ・チュラロンコーン大学、中国農業大学は山口助教授、フィリピン大学は末吉助教授、ボゴール農業大学は堀井助教授、メルボルン大学は池田助教授が窓口教員となった。その後、立山教授・山口助教授はチュラロンコーン大学のアヌデーブ氏、ボゴール農業大学のデビ・ラティ氏、さらに、山口はタイ・インドネシア・ベトナムから交換留学生(主に学部学生)20人以上受け入れた。その中には現在出身大学で教鞭を執っているものもある。その後山口教授は、ベトナム・ハノイ農業大学からラン氏を受け入れて博士課程修了に導いた。彼女はその後帰国し教鞭をとって、副学長を変遷し、40歳代で学長になっている。また、山口教授はベトナムのベトナム国立農業大学と文科省、マレーシアのプトラ大学、ミャンマーの獣医科大学と獣医省と交流協定を締結していった。さらに、後に着任する准教授平井卓哉と2人体制でベトナム、マレーシア、アフガニスタン、ミャンマーからの留学生を受け入れ現在まで継続している。最近でもまた平井准教授はアフガニスタンのヘラート大学と交流協定を締結した。この歴史を遡ってひもとくと、宮崎大学におけるタイ、インドネシア、ベトナム、ミャンマー、マレーシア、中国、フィリピン、台湾、アフガニスタンとの国際交流の源流は当研究室にあるといっても過言ではない。振り返ってみると国際交流協定の締結の際、立山教授は学長や事務長を誘ったが、当時は大学自体に理解が少なく、事務に海外に出向くのに学長を誘うことをよく思われなかったと聞く。山口教授も国際交流については他の大学運営や教育・研究に比較すると価値あるものでないので必要はないと執行部のトップから呼び出されて、口

頭で注意勧告された経験がある。しかしながらこのようなこともあって、国際交流を続けて他大学が東南アジアに進出する時に宮崎大学に20年以上後れをとったよく言われたが、国際交流を押して進めていった当研究室の取り組みは現在の国際交流事情に合っており、大学にも大きく貢献していると言えよう。

平成19年9月に（財）日本生物科学研究所 研究部次長（病理室室長兼務）であった平井准教授が着任した。平井准教授は鳥取大学、北海道大学博士課程修了後、日生研に勤めていた経験を持つ。症例を大事にして、堅実な病理学診断を実践してきた。特に研究では豚の病気に熱心で、現在は豚の呼吸障害症候群（PRRS）について研究しており、豚の病理学に関しては右に出るものはない。平成29年12月現在、研究室は山口教授と平井准教授の2人体制で留学生が11人在籍している。日本人学生も10人と多く研究室は大所帯で賑やかである。（令和4年3月現在、留学生5人、日本人学生7人）

山口が教授になって思うことはこの研究室の歴史の重みである。研究業績はもちろんであるが、育てられ活躍している卒業生が多く、東南アジアに行っても当教室のことを知らない大学は少ない。これまでの多くの教員、学生、スタッフなど人材育成の歴史に感謝している。研究室にはこれまで在籍した人たちのネームプレートが掲示しており、パネルが2つめの半分を超えた。病理は小動物、産業動物、その他多くの分野に携わっているが、その観点から見ると、病理を含めて産業動物分野の獣医の仕事が重要視されてきたのは、宮崎で発生した口蹄疫とトリインフルエンザの発生と食糧安全保障の面からであると理解している。国内のみならず東南アジアの発展途上国の多くの命題も産業動物にある。PCRで既知の病原体存否は示せても、病態の説明や原因不明な疾病の検索に病理は欠かせない。

歴代教授

初代	井上 廉	1940（昭和15）年4月～1959（昭和34）年7月
2代	芦沢 広三	1940（昭和35）年12月～1981（昭和56）年3月
3代	野坂 大	1981（昭和56）年7月～1990（平成2）年3月
4代	立山 晋	1990（平成2）年4月～2007（平成19）年3月
5代	山口 良二	2007（平成19）年4月～（平成30）現在

研究テーマ（2021年3月）

- （1）小動物の病理学的研究
- （2）産業動物学の病理学的研究
- （3）イヌジステンパーウイルス感染症の受容体と病態
- （4）豚呼吸障害症候群（PRRS）に関する研究
- （5）豚下痢症ウイルスに関する研究
- （6）海外の重要疾病の病理学的研究
 - ：ベトナムの豚熱に関する病理学的研究
 - ：ベトナムのアフリカ豚熱に関する病理学的研究



学部学生名簿

No.	氏 名	入学年度	No.	氏 名	入学年度
1	野崎 大輔	S.53	38	門田 君江	S.63
2	岡林 啓二	S.55	39	嶋津 直子	S.63
3	佐藤 浩信	S.55	40	内藤 裕司	S.63
4	世古 庄太	S.55	41	作美 礼乃	H.1
5	曾木 幸三	S.55	42	清水 有美	H.1
6	谷村 信彦	S.55	43	戸村 太	H.1
7	古川 英幸	S.55	44	原田 洋子	H.1
8	池上 裕	S.56	45	吉野 智子	H.1
9	香月 隆延	S.56	46	菅野 宏	H.2
10	勝目 朝夫	S.56	47	黒木 宏二	H.2
11	河野 明広	S.56	48	谷本 憲昭	H.2
12	石川 幸治	S.57	49	中野 康弘	H.2
13	西村 ゆみ	S.57	50	萩原 里香	H.2
14	長谷川貴史	S.57	51	佐藤 美穂	H.3
15	羽津 豪人	S.57	52	田邊 美加	H.3
16	三好 宣彰	S.57	53	鳥丸 安敬	H.3
17	内田 和幸	S.58	54	山岡 佳代	H.3
18	岡崎 欣正	S.58	55	渡邊 学	H.3
19	竹下 明美	S.58	56	牛垣 香織	H.4
20	椿本 亮	S.58	57	森本真一郎	H.4
21	永田 俊一	S.58	58	吉森良太郎	H.4
22	赤石 肇子	S.59	59	牛草 貴博	H.5
23	上野 元伸	S.59	60	友成 由紀	H.5
24	小川 寛大	S.59	61	平尾 恵美	H.5
25	河野 恵子	S.60	62	村中 美樹	H.6
26	高群 美穂	S.60	63	片山 貴志	H.7
27	深津 達也	S.60	64	柑本 敦子	H.7
28	武藤 裕子	S.60	65	橋本 佳奈	H.7
29	池田 敏子	S.61	66	日高 健雅	H.7
30	甲斐 清徳	S.61	67	渡辺佳世子	H.7
31	佐々木裕子	S.61	68	木原 七奈	H.8
32	原畑 潤	S.61	69	関 文緒	H.8
33	伊藤 輝夫	S.62	70	内藤 仁美	H.8
34	奥田龍太郎	S.62	71	中村 善	H.8
35	河野 弘憲	S.62	72	二宮芙美子	H.8
36	平 昭嘉	S.62	73	秋吉 智生	H.9
37	前田 浩二	S.62	74	熊谷 和善	H.9

No.	氏 名	入学年度
75	鈴木 麻理	H.9
76	千々和宏作	H.9
77	山本 香織	H.9
78	梅木 俊樹	H.10
79	岡野久美子	H.10
80	二瓶 和美	H.10
81	原 也恵	H.10
82	大塚 優子	H.11
83	木賀ゆりえ	H.11
84	嶋田 哲	H.11
85	安本真由美	H.11
86	横山 聖子	H.11
87	猪又明日香	H.12
88	加藤浩一郎	H.12
89	古谷 頼子	H.12
90	松岡 千晶	H.12
91	沖田 浩二	H.13
92	織田 円	H.13
93	佐藤 健二	H.13
94	広松 理希	H.13
95	船本美和子	H.13
96	前川恵理香	H.13
97	上田 俊樹	H.14
98	織田 弘章	H.14
99	鈴木 敬之	H.14
100	藤本誠一郎	H.14
101	岡本 明香	H.15
102	恩地美也子	H.15
103	木下友里恵	H.15
104	高本女久美	H.15
105	橋本 菜穂	H.15
106	松本 祐介	H.15
107	吉田 貢太	H.15
108	小澤 昌起	H.16
109	松田 青葉	H.16
110	新崎 裕太	H.16
111	緒方 玲	H.16
112	佐藤 純平	H.17

No.	氏 名	入学年度
113	杉木 佑輔	H.17
114	瀬戸山博則	H.17
115	野地川奈々恵	H.17
116	船曳 智也	H.18
117	平井 祐子	H.18
118	小東 智哉	H.18
119	河角 みき	H.18
120	笹原しずゑ	H.19
121	松田 麻里	H.19
122	大須賀愛幸	H.20
123	山本 司	H.20
124	奥村 尚子	H.21
125	渡山 恵子	H.21
126	鍋田 梨奈	H.21
127	福家 直幸	H.22
128	兼光 宏枝	H.23
129	西崎 文美	H.23
130	伊藤 宗磨	H.24
131	高橋美達翔	H.24
132	永井 康紀	H.24
133	廣池 琴美	H.25
134	水上 彩乃	H.25
135	森 啓太	H.25
136	坂下 主	H.26
137	末永 哲也	H.26
138	藤本 成希	H.26
139	森岡 由衣	H.26
140	今富 美波	H.27
141	小島 大地	H.27
142	元山 就斗	H.27
143	稲永美乃里	H.28
144	川口 虹穂	H.28
145	砂山 大地	H.28
146	山岸明日香	H.29
147	筒井 静	H.30
148	中井 睦	H.30
149	山下 鉄平	H.30

修士/博士課程学生・研究生名簿

No. 氏 名	入学年度	No. 氏 名	入学年度
1 呉 銘芳	S.55	37 兒玉 亜侑美	H.26
2 津野健一郎	S.57	38 Mahammad Hakim Niazmand	H.27
3 アッチャリヤーサイラスーツ	S.62	39 Jamshid Noori	H.28
4 趙 徳明	H.2	40 Ohnmar Myint	H.28
5 Matovelo Jayro Aimos	H.3	41 Rahima Hasheme	H.29
6 Priosoeryanto Bambang Pontjo	H.3	42 Apisit Pornthummawat	H.29
7 Anudep Rungsipipat	H.7	43 Mathurot Suwanruengsri	H.29
8 Anucha Pornpattanakiat	H.8	44 Nelissen Sophie	H.30
9 Dewi Ratih Agungpriyono	H.8	45 Niazi Ahmad Massoud	H.30
10 Tanong Asawakarn	H.8	46 Phawut Nueangphuet	H.30
11 Dwi Kesuma Sari	H.9	47 Dewulf Suzanne	H.31
12 ソンポンテチャガムスワン	H.9	48 周 子恒	H.31
13 Sapasiri Siripronprasert	H.9		
14 Sirichai Junsuwanaruk	H.10		
15 Weerawan Tiwananthagorn	H.10	秘書 兒玉 淳子	H.19
16 藤吉 光子	H.10		
17 ヌッサラパンパーパー	H.12		
18 Nguyen Thi Lan	H.15		
19 川畑 敦	H.15		
20 Nguyen Thi Trang	H.16		
21 Suchanit Ngamkala	H.16		
22 Kien Tian Tiung	H.17		
23 Charoenvisal Nataya	H.18		
24 Pham Thi Lan Huong	H.18		
25 Truong Ha Thai	H.19		
26 Nguyen Thi Huong Giang	H.20		
27 Nguyen Phuc Phung	H.21		
28 清水 紘子	H.22		
29 Maneesaay Phudit	H.23		
30 Noordin Mohamed Mostapha	H.23		
31 Truong Ha Thai	H.23		
32 Watanyoo Prataupiriya	H.23		
33 Habibi Wazir Ahmad	H.24		
34 Nguyen Van Diep	H.25		
35 Nurul Izzati Binti Uda Zahli	H.25		
36 Angeline Teh Ping Ping	H.26		



野崎大輔 昭和 53 年度入学・1984 年(昭和 59 年)卒・V53

山口先生との縁を振り返って

◎「縁」その壺（学生時代）

山口先生との出会いは、昭和 57 年に先生が助手として研究室に赴任してこられた時です。当時、獣医学科は船塚キャンパスにあり、病理研究室はメインの部屋が獣医・畜産棟（新館）の 2 階でしたが、助手の山口先生と研究生の私は、別棟で木造の鏡頭教室（旧館）の部屋でした。

◎「縁」その弐（県職員時代）

地元の宮崎県庁に就職した私は、県職員生活の多くを食肉衛生検査所で過ごしました。その中で県の病理分科会の活動を大学で行い、症例供覧会や業績発表会を通して、立山教授、山口助教授、内田先生から、アドバイスを受け、ディスカッションを重ねるなど、多くの時間を先生方と楽しく過ごさせていただきました。

◎「縁」その参（同門会）

私が学生の頃、野坂先生が中心となり、病理同門会が発足しました。初代会長は玉田省吾氏で、私が入庁した最初の職場の所長でした。同門会は毎年 11 月末に開催していましたが、大学のカリキュラム変更に伴い開催が難しくなりました。ある年、山口先生にお願いして、卒論発表会の打ち上げに当時の会長の熊元一徳氏と 2 名で強引に参加させていただきました。山口先生と協議して、その後は卒論発表会の打ち上げを兼ねて研究室の学科生、留学生との交流を図りながら同門会を開催する事となり、現在に至っております。私はその後も毎年会に参加し続けた結果、現在は同門会の会長を拝命しております。

今年は新型コロナウイルスの影響を受け、開催できませんでしたが、来年は皆様の参加をお待ちしております。

最後に、学生時代から約 40 年、山口先生にはお世話になりっぱなしでした。また、先日は、私の息子が先生と一緒に仕事をしたようで、先生から「まさか野崎親子と一緒に仕事するとは思わなかった」と笑顔で言われ、本当に先生とは不思議な「縁」を感じています。山口先生、今年度で退官されますが、引き続きよろしくお願い致します。

谷村信彦 V56

山口先生、長い年月に渡り教育と研究活動にご尽力頂き大変お疲れ様でした。私は宮崎大学在籍時に新旧両方のキャンパスで山口先生のご指導を賜りました。私自身が獣医病理学の分野で生き延びることができたのは、大学在籍時に身に着けた知識や技術が今まで生きていたからであると思います。山口先生のご退官を機会として改めて感謝申し上げます。



内田和幸 V58

山口良二先生が昨年 2020 年 4 月 3 日に満 65 歳を迎えられ、定年の時期であることは存じていたので、同年の 3 月末に予定していた第 7 回 JCVP 学術集会を COVID-19 の影響により宮崎開催が叶わなかったのは、今でも残念です。開催が実現すれば、獣医病理学に携わる卒業生が多く集まり、旧交を温めるよい機会になったと思います。さて、このたび山口先生の退職記念冊子を作成したいとのご連絡を平井先生よりいただき、ふと先代教授の立山 晋先生の記念冊子の編纂が叶わなかったことも思い出しました。このため、すこし主旨からずれるかもしれませんが、私が宮崎大学家畜病理学教室の助手として過ごしていた頃の想いを、先代の立山先生にもご登場いただきながら書きとめさせていただきました。

私は立山先生が定年退職された一年後の 2008 年 1 月に転職しましたので、宮崎大学家畜病理学教室での教員生活は、常に立山、山口、内田という 3 名の中での立ち位置を意識しながらのものでした。3 名とも宮崎県出身者で、旧薩摩藩の封建体制の香りがまだ色濃く残る風習下で育ったものと思います。特に山口先生は“良二”という名前からしばしば誤解されがちですが、“長男”であるとお聞きしていたので、旧薩摩藩の家に生まれた長男として、大事に、しかも厳しく育てられたことと存じます。ただ先生のご両親が“良一”と命名されなかったことにより、当時 TV によく登場した俳優さんと間違えられることを回避したのは、山口先生にとって幸運でした。私はいわゆる“田分けもの”の三男の末っ子なので、あまり責任のない 3 番目の立ち位置を、居心地良く感じていました。この頃の山口先生は、自由奔放な長男と生意気な三男に挟まれ、慣れない次男としての立場で、当時流行した「ダンゴ三兄弟」という歌のとおり、日々色々とお苦労されたことでしょう。現在、次男としての立場を 10 年ほど過ごしてみて、改めて当時の山口先生の心労に想いが及んだところです。その節は大変申し訳ありませんでした。

私からみた立山先生は何があっても基本的に冷静で、しかも奇想天外なことを発想される“冷徹で天才肌の”先生で、これに対し山口先生の印象は、基本的にとってもおおらかで、学生さんや後輩に頼られると最後まで愛情をもって熱心に面倒をみる“情熱大陸系”の先生でした。いずれも私に乏しい気質を両先生がお持ちでした。私は、ヒトの赤血球型には意味があると感じているので、立山先生が B 型、山口先生が O 型、そして私が A 型という三者三様であったことも、独特の化学反応をもたらし、研究室としては良いことだったのではないかと考えています。身の回りの物の整理という点でも三者三様でした。立山先生の部屋がきっちり片付いているのに対し、山口先生の周辺は書類などが山積み、かつ散乱したカオスでした。私は今でも不要と思ったものは、すぐに捨ててしまうことが多いので、あとで後悔することもしばしばあります。山口先生は物持ちが良いうえに、あのカオス状態下でも、何がどこにあるのかを、比較的正確に把握されていました。あれはちょっと私には真似のできない芸当です。蛇足ながら現在私が在職する東京大学獣医病理学研究室も、そういえば昨年まで B 型（中山教授）、A 型、O 型（チェンバーズ助教）の混成チームでした。

私が今でも感慨をもって眺める古い論文で、立山先生が助教授の時代に筆頭著者として書かれた牛の異常産に関するものがあります。Tateyama S, Yamaguchi R, Uchida K, D., Nosaka, et al. An outbreak of congenital hydranencephaly and cerebellar hypoplasia among calves in South Kyushu, Japan: a pathological study. Res Vet Sci. 1990, 49(2):127-131. 英語表記で立山、山口、内田の 3 名の氏名を並べると不思議な連続性があります。さらに先々代教授の野坂 大先生の D が通称の Dai の意味で表記されていたのであれば、ひとつのラインがここで完結します。“家畜病理学教室”としての歴史は、立山先生の退職時に一旦完了し、山口先生は新しく“獣医病理学研究室”と改名された講座の初代教授として 10 年以上にわたり色々とお苦労され研究室を運営されたことと存じます。とはいえ、長男として生まれ育った山口先生にとっては、ご自身の性格に合った、もっとも相応しい立場で、自分らしく十分にご活躍できた時期でもあったのではないかと推察しております。

山口先生、長きにわたる教員生活ご苦労さまでした。今後も宮崎大学の家畜病理学教室と獣医病理学研究室の卒業生・在校生のよき相談役として、これまでと変わらないおおきな情熱を注いであげてください。

宗正敏子 V65

私が病理学教室に入った時、山口先生は助教授で、とてもとんがってぎらぎらしていて、「コワイナ」というのが第一印象でした。しかし、先生の気さくな人間らしさ全開の人柄は魅力に溢れ、これまでに先生が積み重ねてこられた多くの功績の秘密は、先生ご自身の原動力に加え、その人間的魅力で周りを巻き込んで達成されたものであるように思います。

80周年で大変久しぶりにご挨拶させて頂いたところ、にこにこと、あの頃と変わらないキラキラした目でお話して下さり、温かい気持ちになりました。またその時、先生がとてもお若くて、肌艶が良かったのにも驚きました。オリーブオイル、今でも続けていらっしゃるのでしょうか？

その後も世の中には短い時間の中で大きな変化があり、今もその渦中にありますが、先生のキラキラした目になって、私もキラキラ乗り越えていきたいと思います。

長い大学生活、本当にご苦勞様でした。次のステージ、先生のご健康をお祈りし、ご活躍を楽しみにしています。

伊東輝夫 V65

病理学教室では、山口先生にはたくさんのことを教えていただきました。剖検では血腫牛、鏡検では皮膚生検が思い出深く、集談会の発表原稿を何度も修正していただくなかで、ひとつのテーマを掘り下げていく楽しさを教わりました。飲み会も思い出深く、学生の我々といつも本音で語り合ってくださっていたのが印象的でした。あらためて振り返ると、学術集会、宴会を問わず、どんな話でも好奇心をもって聞き入り、真摯に対話に臨む先生の姿にはかなり影響を受けた気がします。これからも一杯やりながら、お話を聞けることを楽しみにしております。長い教員（官）生活、本当にご苦勞様でした。

平昭嘉 1987年(昭和62年)入学・1993年卒・V62

山口良二先生、長年の御勤務と獣医学への御貢献、お疲れさまでした。私が家畜病理学教室に入った頃に山口先生が助教授に就任され、先生の御指導の下で研究を行っておりました。その頃の私は研究をさぼることが多々あり、さぞや先生にご迷惑をおかけしたことと、恥ずかしく思っております。それでも根気よく私をご指導いただき、なんとか卒業することができましたことは、感謝の念に堪えません。

現在、私は獣医療を離れ、内科医として外務省に入省し、在外公館で勤務しております。退官されてもご多忙のことと思いますが、もしお時間が許すようであれば、海外旅行はどうでしょうか？その時、私の任国がどこになっているかはわかりませんが(アフリカなどの発展途上国の可能性が高いのが残念です)、ぜひお立ち寄りください。先生から受けた御恩を返すには足りませんが、歓待させていただきます。

それでは、先生の御健康と、これからのさらなる御活躍を願っております。

繰り返しになりますが、本当にお疲れさまでした。

内藤裕司 V63 (H6 卒業)

山口良二先生との思い出

長くのお勤め本当にご苦労様でした。先生にご指導いただいてから 30 年が過ぎようとしております。在学中に加えて、就職後宮崎で勤務していた時期にも先生からご指導を賜る機会に恵まれ、学生時代から社会に出て現在に至るまで大変お世話になりました。本当にありがとうございました。思い出などを少々述べさせていただきます。

先生は出会った時からこれまでずっと多才で情熱的です。

語学堪能、座学におかれては病理学・ウィルス学を中心とした豊富な知識をわかりやすく御教授されるとともに、実験室では、最先端の技術を器用に操りながら我々にご指導くださりました。一方で、ツナギを着て解剖刀を持てばパワフルで丁寧な病理解剖を行い、極めて論理的な診断を下されておりました。

あれもできる、これもできるといった先生からのご指導にはとても説得力があり、獣医師、社会人、大人・・・漠然としたイメージしか持っていなかった学生の私にはとても刺激的で強い影響を受け、憧れを持ったものです。山口先生のようなユーティリティーな獣医師、社会人、大人を目指して日々奮闘してはきたものの、凡人の私の様な人間では、なかなかどれ一つとしてモノになっていない状況です。どうぞこれからも引き続きご指導よろしくお願いいたします。

新しいステージでの先生のご活躍を楽しみにしております。

森本真一郎 1998 年(平成 10 年)卒・V67 卒

コロナの世界は予想だにできなかったですが、そんな色んな事が起こる人生・世界を長年乗り越えての無事のご退官を心よりお喜び申し上げます。

僕の大学時代は酒にしても何にしても今なら事件になる様な事も笑いあって楽しんでいた時代で、大いに学生生活を満喫したな～と言う充実感で一杯ですが、同時に全く勉強していなかった事が今更ながら恥ずかしいです。そんな落第生の僕が何も考えずに一番優秀な人間が集まるべき病理教室に来たのは、ちょっと場違いだったかも知れないですが、今頃になって役に立っていますし誇りになっております。

眼を閉じると大学時代の山口先生はいつも何かに追われるが如く忙しくされている感じでしたが、同じく空手をしていたからなのか当時の自堕落な僕に対して気にかけて頂き、色々とお声がけを頂いた気がします。

学生時代は贅沢に勉強できる環境にありながら、勉強しない事にも自由な環境でもあったので、一時期は病理教室所属なのに招集があれば冷凍庫の整理をするだけの単なる肉体労働者と化し、格闘技ばかりしてパチプロと化している日々が有ったのですが、山口先生は卒論においてもそんな僕が達成できて興味を抱きそうな絶妙な課題（白内障）を与えて下さりました。学生時代ならではの実験も沢山させて頂き、お陰様で楽しく卒論を終了できました。僕が山口先生と知遇を得たのは早いもので 25 年近くも前で、お互いに若かったので気楽な学生として接した者としては「象牙の塔の偉い研究者」と言うより、まさしく「血の通った情に溢れる兄貴」の様でした。本当に感謝しております。

多忙な教授生活お疲れ様でした！これから退官して何にも追われずに、ゆっくりと世界の美しさや人生の情緒を楽しんで頂ける時間が増えます事を心より祈念しております。

お元気で、また宮崎で一緒に飲める事を楽しみにしています！

田邊美加 V70

山口先生、ご退官おめでとうございます。

海外志向の強かった私は、入学時からアフリカなどの海外で働くことを夢見ていました。自分で診断から治療までを一貫して行うことを目指しましたので、大学にいる間にまずは診断ができるようになっておこうと病理学教室の門をたたきました。しかし、実際に病理学に携わってみると、その奥深さにもっと究めたいと病理学に全振りし、結局立ち止まることなくそのまま突っ走りました。おかげ様で現在、病理学を生業にすることができています。そんな病理学を学んでいく要所、要所できっかけを与えてくださったのが山口先生です。

まず一番に思い出されるのが、山口先生のコーネル大学留学時代に知り合われた皮膚科の永田雅彦先生をご紹介いただき、皮膚病理を学ぶ機会を得たことです。その後、山口先生の上に内田和幸先生がコーネル大学に留学されましたが、6年生だった私は、ちゃっかりとコーネル大学で学外実習をさせてもらいました。そして、この経験が、私自身がコーネル大学で学ぶ大きな転機となりました。さらに、この留学のためのスポンサーも、実は山口先生が見つけてきてくださいました。このように山口先生のおかげで私の病理人生はかくも順調に回ってきました。本当に感謝しても感謝しきれません。

ところが、図らずも、現在とある論文で山口先生をやきもきさせてしまっており、心苦しく思っています。学生時代はそれほど手のかかる学生ではなかったと自負しているのですが、卒後こんなにも時間が経ってから、しかも退官直前の先生を悩ますとは思ってもいませんでした。このままどこかに論文が受理されることを願ってやみません。ご退官のその日まで、現在進行形でお世話になりっぱなしですが、どうぞあと少し、お付き合いをいただけたらと思います。

友成由紀 平成5年入学，平成11年卒業

学生時代にはクラス担任だけでなく、研究室での指導教官としても、とてもお世話になりました。

沢山の思い出の中でも、研究室での日々は強く心に蘇ってきます。入室当初、両眼の顕微鏡に慣れるところから始まった私を、苦笑いしながらご指導頂いたこと、窓から見えるキャンパスを横目に、毎日培養細胞の部屋に籠ったことも、懐かしい思い出です。

時には生意気な態度を取ってしまうような学生だった私にも、先生は真摯に向き合って指導して頂きました。社会人になってからは、学会でお会いすると、優しく（たまにはお酒も入った赤ら顔で）楽しく話しかけて頂きました。

先生の功績とともに、この病理学研究室が益々発展していくことを祈念しております。長年に亘る第一線でのご活躍、本当にお疲れ様でした。ありがとうございました。

来田（松岡）千晶 平成 18 年卒業・V75 卒

山口先生、ご退官お祝い申し上げます。長きに渡って、病理一筋でたくさんのお仕事されてられましたこと、病理を仕事にする者としては、尊敬の念に堪えません。

さて、山口先生との一番の思い出といえば、ランさんの買い物につきあったことです。確かランさんがフライパンの蓋を買うかどうかで悩んでいましたよね。ちょっとわがままなランさんに根気強くつきあわれていた山口先生を拝見して、そのとき初めて（すみません！）山口先生は大変優しい人だとわかりました。

私が在学中、山口先生はいつもお忙しそうでしたが、お時間があれば、いつも快く、いろいろなことをご教示していただきました。お話からはいつも山口先生の熱意と志を感じることができ、私自身も病理への関心を強く持つようになりました。

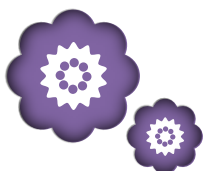
卒業後、JCVP の学術集会で山口先生にお会いした時も、病理や学生さんの話などいろいろお聞かせいただきました。お会いできるのも学会参加のひとつの楽しみにしてまいりました。ですので、コロナの影響で、山口先生が大会長をされ、宮崎で開催されるはずだった学会がなくなったのは特に残念に思いました。状況が落ち着きましたら、宮崎を訪れ、山口先生にお会いしたいと思っています。

在学中から現在に至ってまで、ご指導いただきありがとうございました。今後どうぞよろしくお願い申し上げます。

松本祐介 平成 15 年入学・2009 年(平成 21 年)卒業・V78

山口先生

宮崎大学獣医病理学講座で先生にインフルエンザとジステンパーウイルスの実験を教わった頃から 15 年が経ちました。私は宮崎大学卒業後、大阪大学・京都大学・Cleveland Clinic・Case Western Reserve 大学・和歌山県立医科大学を経て現在は東京都医学総合研究所にいます(なんて引っ越しの多い人生でしょう)。この間ずっとウイルス学の研究を続けてきました。初めてウイルス学を教えて下さったのが山口先生でなければ、このようなウイルス研究者としての人生はなかったと思います。素人だった私が提案する荒唐無稽な研究プランを先生はとても真面目に聞き、その実現に向けて動いて下さりました。先生のおかげで研究の楽しさを知り、その気持ちが今でも続いています。先生は私たち夫婦の結婚式のスピーチもして下さいました。研究者としての就職活動でも多くのアドバイスを頂きました。私の妻の就職でも大変お世話になりました。どれだけ感謝の言葉を述べても足りません。いつか私が、先生が私の指導教官であったことを誇りに思えるような、素晴らしい研究成果を上げることができれば、それが恩返しになるのでしょうか。



恩地美也子 V81

山口先生、ご退官おめでとうございます。先生には学年担任そして研究室では指導教官としてたくさんのご指導いただきました。今回筆をとるにあたり当時のことを思い返していると、クスッと笑えたりどこか心が和むような感覚に包まれます。きっと先生のざっくばらんで前向きなお人柄によるものなのだと思います。先生、覚えていますか？海外出張のお土産にジャコウネコの糞から作った希少な高級コーヒーを淹れてくださったこと。先生の部屋で雪崩と化している書類をPDF化したいとおっしゃって1枚1枚ひたすらスキャンしたこと。思い出されるのは堅苦しい教育的なことより他愛もないエピソードばかりですが、今回をきっかけに先生との思い出から学んだこともあります。先生は卒業研究のディスカッションをする、ことあるごとに「研究っておもしろいでしょ？」とおっしゃっていました。いまひとつ主体性の見えない私がもどかしく、あるのかも疑わしい探求心にはっぱを掛けてくれていたのかもしれない。「え？ぼくそんなこと言ったっけ？」という声が聞こえてきそうですが。あれから10年以上が経ち、先生のおっしゃっていたことが少しはわかるような気がします。先生は常に探求心と行動力を持っていたらっしゃいました。そんな先生には遠く及びませんが、研究に限らず人生のいろいろな場面で先生を見習って主体的に向き合いたいと思います。先生のもとで送った大学生活を通じ、時間が経ってもいまだに学ぶものがあります。本当にありがとうございました。これからもお元気で今後一層のご活躍をお祈りいたしております。



福家直幸

宮崎大学：平成 22 年入学・平成 28 年卒業、宮崎大学大学院：平成 28 年入学・令和 2 年卒業

山口先生、このたびは、ご退官おめでとうございます。

先生と初めてお話ししたのは、学部三年次、入室の挨拶時です。入室の動機は、どこかの研究室に入室しなければならないのなら、厳しそうな病理にしようという気持ちからでした。

先生には、病理の基礎から研究に対する姿勢まで様々なことを教えていただきました。「大動物は肉眼で診断すること」「病理総論は大事」「病理以外の分野も熱心に勉強すると研究の幅が広がり武器になる」等々。ここでは、全て述べることはできません。また、学部生時代は、多くの学会や勉強会に参加させていただき、病理に触れる機会を多く設けていただきました。さらに、人脈の大切さも教えていただきました。

学部 3 年間ではもの足らず、大学卒業後も病理の勉強を続けたい意思から、平成 28 年 4 月に宮崎大学医学獣医学総合研究科博士課程に進学しました。同時に、学費の都合で宮崎県庁に入庁をし、社会人院生としての道を選択しました。先生は当初「社会人院生としての進学は研究する上でハンディが大きい」と心配されていましたが、最終的には「学外での勉強も今後の人生に役立つから」と背中を押していただきました。通常、院生として進学する際は、職場の所属長の許可が必要ですが、先生自ら県庁に掛け合ってください、どうにか社会人院生として進学することができました。研究時間は、土日、平日の勤務時間後の限られた時間しか無く、先生にも無理をいって休日問わずディスカッションの時間を設けていただきました。無事 4 年少々で博士号を取得できたのは、先生のようなサポートがあったおかげです。

大学院卒業後も、論文指導や県の病理勉強会等でお世話になっています。毎年、7 月には県の業績発表会の審査員も勤められ、先生のご活躍は学外でも非常に輝かしいものです。

この歴史ある病理学研究室に入室し、山口先生の下で勉強できたおかげで、病理の考え方だけでなく、人としても成長することができました。次は、私が先生から教わった様々な知識や経験を皆に伝えていくことで、微力ではありますが、恩返しをしていきたいと思っています。

最後に、どうかお身体にはくれぐれもご留意いただき、素敵な第二の人生を送られることを願っています。山口先生、お世話になりました。

伊藤宗磨 平成 30 年卒

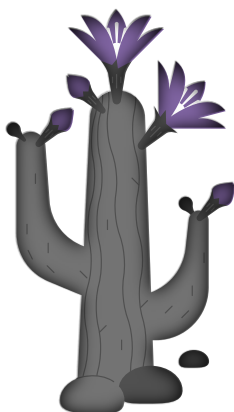
現在、私は東京大学大学院の獣医病理学研究室に在籍しており、しばしば内田准教授と宮崎大学の今昔を語ります。そうした話の中には勿論、山口先生が登場します。山口先生との思い出、山口先生あるある、山口先生のモノマネ…（内田先生のモノマネクオリティには毎度舌を巻きます）。話をしていると、宮大時代の懐かしい記憶が呼び起こされます。私から見た山口先生は、とても好奇心旺盛で、珍しいモノや新しいモノに目がありませんでした。学会で得た情報や学生が持ってきた最新の知見など、関心をもって耳を傾けてくれました。興味は学術的なことに限りません。先生が当時最新の iPhone を購入された際は、私に自慢するとともに、便利なアプリや裏技（?）を教えてほしいと度々頼まれ、教授室で時間を忘れて先生と談議していました。本当に忘れてしまい、先生を講義に遅刻させてしまったこともあります（生徒の皆様ごめんなさい）。学会へ向かう飛行機の中でお喋りが盛り上がりすぎてしまい、前の席のおじ様に怒られたこともありました（お客様ごめんなさい）。こんな風に先生の突飛なひらめきやお戯れに学生が巻き込まれ、振り回されることもありました。とはいえ、思い返せばラボの楽しい日常で、どれもいい笑い話です。そんな衰え知らずの探求心と発想力が、長年にわたる先生の研究の原動力になっていたのだと、私は推察します。そしてまた、病理学への愛情も並々ならぬものでした。切片を観察しているとき、ディスカッションしているとき、学会でマイクの前に立つとき、先生の目は子供のようにキラキラと輝いていました。きっと初めて病理学に出逢ったときの、病理学を志す者であれば誰もが体験するあのワクワク感を、今なお忘れずに心に留めておられるのでしょう。そんな先生と過ごした、短くも濃密な研究生活の中で、私もまた病理学のおもしろさを教わったのです。先生に導かれ、先生に背中を押され、私も先生と同じ道を歩んでいます。御退官心よりお祝い申し上げます。

森啓太 2013 年(平成 25 年) 入学・2019 年卒業

山口先生の下で過ごした 3 年間は、臨床医となった今も私の貴重な財産です。

先生の病理医としての類い希なる観察眼と探求心は学生の私からみても傑出しておりました。そんな先生の姿を目標にこれからも一獣医として精進して参ります。

長い間教壇に立たれ、本当にお疲れさまでした。御退官後はゆっくりと体を休めてください。コロナ禍が収まったら先生の大好きな宮崎の芋焼酎を是非飲み交わしましょう。



坂下主 平成 31 年卒

ご退官おめでとうございます。

山口先生には獣医病理学の基礎から楽しみまで幅広くご教授頂きました。

心より感謝申し上げます。これまで頂いたたくさんの学びを無駄にせぬよう、仕事は勿論のこと人としても精進し続けて参ります。

健康にご留意され、第二の人生を謳歌されますことをお祈り申し上げ、お礼とさせていただきます。

森岡由衣 平成 31 年卒

山口先生は温かいお人柄であり、学生自身の主体性を尊重する先生でした。先生はお忙しい中いつも病理診断や研究について多くの時間を割いて指導してくださいました。それは、すぐに正解にたどり着くことというよりは私自身が色々な可能性について考えるプロセス自体を大切にしてくださったものだったのだと感じています。また、先生は学生どうしの交流も非常に重要視されており、先輩後輩関係なく一緒に顕微鏡をみてディスカッションすることの大切さを教えてくださいました。ある症例について他の診断者と有意義な議論を交わすことで異なる発想が生まれたり、気づけなかったことに気づけたり、さらにそこから派生して別の疾患についても考えるようになったりするものです。病理診断では知識や観察した所見、そして経験が非常に大切な要素であり、逆に言えば主観的になりやすいからこそ、そういった他人とのコミュニケーションが正しい診断へ導き、奥深い病理の世界を垣間見させてくれるのだと思います。そのようなことに気づかせていただき、私は卒業しても病理を楽しむことができます。宮崎大学の病理研究室で山口先生のもと勉強ができて良かったです。ご退官とのことで、これまで長い間お疲れ様でした。本当にありがとうございました。

今富美波 平成 27 年入学 令 3 年卒業

山口先生、このたびはご退官おめでとうございます。山口先生には、卒論をはじめ様々な機会でお世話になりました。病理学研究室入室時は、病理の基礎さえ理解できていなかった私に、先生とのディスカッションを通じて病理の根本から、そして病理の面白さまで教えて下さったのは山口先生です。大学生時代 6 年間を振り返っても、先生とのディスカッションの時間はとても貴重な時間だったと思います。今後も山口先生の下で教わり、身に着けた知識や技術を活かしていきたいと思っています。またの機会に先生とお会いすることができることを大変楽しみにしております。これからもくれぐれもお身体に気を付けてお過ごしください。

元山就斗 平成 27 年 4 月入学、令和 3 年 3 月卒業

山口先生、ご退官おめでとうございます。

いつも先生と病理所見のディスカッションをしていると、先生の知識の豊富さに驚かされ、毎回沢山のことを学ばせて頂きました。

また勉強面だけではなく、進路を考える上でも多くのことを教えて頂き、大変お世話になりました。

長い間本当にお疲れ様でした、そしてこれからもお身体にお気をつけてください。ありがとうございました。

稲永美乃里 平成 28 年度入学

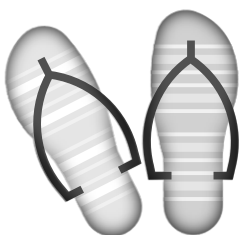
御退官心よりお祝い申し上げます。

山口先生には、研究室に入ってからすぐにベトナムでのアフリカ豚熱の研究で大変お世話になりました。ベトナムでは研究員の方々に本当に親切にして頂いて、山口先生の偉大さをしみじみと感じました。私も卒業後には先生のように何事にも情熱を持って取り組んでいきたいと思います。先生のもとで多くを学ばせていただいたこと、心より感謝申し上げます。先生の今後のご健康とご活躍をお祈りいたします。

川口虹穂 平成 28 年度入学

定年御退官心からお祝い申し上げます。山口先生は病理診断や朝ゼミ、留学のことなど私がいつどんな相談をしても嫌な顔一つせず親身に対応してくださりました。インドネシアへ留学し、バンバン先生やインドネシアの学生さんとお会いできたのもひとえに山口先生のおかげです。本当にありがとうございました。山口先生と行うディスカッションはいつも新しい発見が多く、興味深かったです。先生とのディスカッションを通して病理学を追究することの面白さを知ることができたと思います。その他、病理とは関係のない雑談もためになる話が多く、楽しませていただきました。山口先生からいただいた知識やお言葉を今後も忘れずに、分からないことを楽しむぐらいの勢いで様々なことを追究していきたいと思います。

長い間、大変ご苦労様でした。今後益々のご活躍と御家族皆様のご健勝を祈念申し上げます。



山岸明日香 平成 29 年度入学

山口先生、御退官心よりお祝い申し上げます。

研究室の配属希望を提出する三年生の年末、私はこれといって興味が持てる分野が見つけられずにいました。そして希望提出締め切りの前日、どうせやるならいっそのこと一番賢くなれそうな研究室に入ろうと思い、病理学研究室への入室を決めました。勢いにまかせて入室したものの、初めはなかなか病理の面白さに気づけず、自分は向いていないのだろうかと思悩むこともありましたが、先生とディスカッションした後には不思議と、もっと勉強したいという意欲に駆られました。先生が病理を楽しまれている姿につられて、私も病理のおもしろさを知ることができたように思います。できることならば、卒業するまで山口先生のもとで学ばせていただきたかったのですが、御退官後も先生から学んだことを胸に精進したいと思います。二年間という短い間ではありましたが、山口先生のもとで学ばせていただけたことを大変光栄に思います。本当にありがとうございました。

余談ですが、例年であれば空席がないほど人気のある病理学研究室にもかかわらず、私の代は希望者がたった一人というめずらしい学年でした。いつの日かこのメッセージを見返されたときに、あの異例の代の山岸と思い出してくだされば幸いです。

またいつかお会いできる日を楽しみにしております。今後ともどうかご自愛ください。

山下鉄平 平成 30 年度入学

ご退官おめでとうございます。

私たちの学年は山口先生が講義なさる最後の学年として病理学総論を受講しました。その時の知識が基礎となり、いま病理学について得られる経験が身になる形で享受できていると思います。

山口先生の下で勉強できたことを誇りに思います。これからもご健勝、益々のご活躍をお祈り申し上げます。

筒井静 平成 30 年度入学

ご退官おめでとうございます。ご在任中は、短い間だったにもかかわらずひとかたならぬご厚情とご指導を賜り、深く感謝いたしております。獣医病理学の知識から生き方などにいたるまで、山口先生にご教授いただいた様々なことを胸に、これから精進して参ります。山口先生の今後のご健康とご活躍をお祈りいたしております。

中井睦 平成 30 年度入学

山口先生、ご退官おめでとうございます。

短い間ではございましたが、先生のご指導を受ける機会を得ることができ、私はとても幸運でした。本当にどうもありがとうございました。

今後、益々のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

Bambang, Risa, Tiaska and Karina

YAMAGUCHI RYOJI.....My Supervisor, my colleague and my friend



It was back in January 1991 when for the first time I came to Miyazaki to enter the Ph.D course at The United Graduate School of Veterinary Sciences Yamaguchi University. I still remember when we met for the first time and I introduced myself as Bambang Pontjo Priosoeryanto from Indonesia and he smiled at me and shook my hand with a very warm and welcoming heart.

Later he became my co-supervisor for my Ph.D study.....many sweet memories still remain in my head and my heart. He is a very welcome person especially when I have difficulties in understanding the pathology and research work or discussion about the necropsy and histopathological slides. Mostly every afternoon we drink ocha together in our lab whether I serve or he serves the green tea with the hot water. We enjoyed it while talking about many light things in some ways we are similar, especially drinking beer but the difference between us is that he likes to drink Japanese shochu while I don't.

He is a very nice person and helped me a lot with my daily work at the Laboratory of Pathology University of Miyazaki as well as he is very understand to my condition living in Miyazaki with my wife Risa who also a Ph.D student same as me under the supervision of Prof.

Yoichiro Horii and our daughter Tiaska who study until 1st year in the Kibana Shogakko. Thank you Yamaguchi sensei for all you did during my study until my graduation in March 1995. My stay in Miyazaki was extended for one year as a postdoctoral researcher under Prof. Tateyama Susumu guidance. During this extension time, we extended our warm and constructive atmosphere.... I really enjoyed it.

After I came back to Indonesia in March 1996 we still contacted each other especially because we are active in Asian Society of Veterinary Pathology (ASVP) and still meet many times in Miyazaki because I have a chance to visit Miyazaki many times as well as Yamaguchi sensei also visit several times to Indonesia. It is a good relationship between University of Miyazaki and IPB University where I work as a Professor at the Division of Pathology, because we have had a strong collaboration under the MoU since 1993 up to present. From the bottom of my heart, I would like to thank Yamaguchi sensei for everything you already did to me when I stayed for study in Miyazaki until I finished my Ph.D as well as after that. You have to know that your contribution to me is very valuable and irreplaceable by others and without your help I will not become Bambang as you know today.

Finally, I congratulate for your Retirement Prof. Dr. Ryoji Yamaguchi, we always pray and hope you are fine, safe, happy and may the blessing of God be with you and your family...be a Yamaguchi sensei as I know you the first time with warm, welcome, humble, energetic, active and always happy..... but reducing the Shochu drinking for your health.

Achariya Sailasuta 1987

He is my best friend as always more than 30 years. Since we have met in the Department of Veterinary Pathology, Faculty of Agriculture, Miyazaki University, Japan, in 1987. He was an Assistant Professor at that time. Among those with Prof. Nozaka, Professor and Prof. Tateyama, Associate Professor, who were all my Sensei. He is both virologist and pathologist as two in one. It was his role as a teacher that particularly brought joy to his professional life. His excellence as an educator has been acknowledged on multiple instances by his students and his colleagues. His strong bridge that has created between Faculty of Veterinary Science, Chulalongkorn University and Department of veterinary Pathology, Faculty of Agriculture, Miyazaki University has sustainably gone so far. The time is going very fast. Thanks so much indeed for everything that you have given to us.

In this valuable occasion on your retirement, when you're looking back to past. It is such a miracle thing that we have known and built up our memorable friendship. I'm longing our precious time in Miyazaki.

Wishing you have a nice time with your family, good health and take care.

Best regards,

Somporn Techangamsuwan 1997

My Professor forever Prof.Dr.Ryoji Yamaguchi, I have been met Prof.Dr.Yamaguchi in Miyazaki University since 1997 (when I was an 1-year exchange student between Miyazaki and Chulalongkorn University). He was so generous, helpful and empathic sensei to our Thai students. Since then, we are continuing keep contact with academic cooperation. I have learnt many things from him. What I am today it is also the result from his valuable guidance to me. On this special occasion for sensei's retirement, I wish sensei all the happinesses, wealthy, and healthy. Sincerely yours,

Sirichai Junsuwanaruk March 1998-1999

Thank you for everything you've done for me. I wish you nothing but the very best in your retirement. ...Happy retirement sensei

Nusara punprapa 1st April 2005 – 1st March 2006

I would like to thanks for fantastic opportunity from Yamaguchi sensei and professors in pathology department, Miyadai and Chulalongkorn university. The knowledge about distemper cell line, apoptosis and RNA inspired me. I carried all value basic for complete my master degree in Thailand (relate with PRRS restrictive enzyme and sequence. Furthermore, sensei taught me about discipline. His word..."Nun kung check your cell line every morning" always in my mind.

Nataya Charoenvisal April 2006 – April 2007

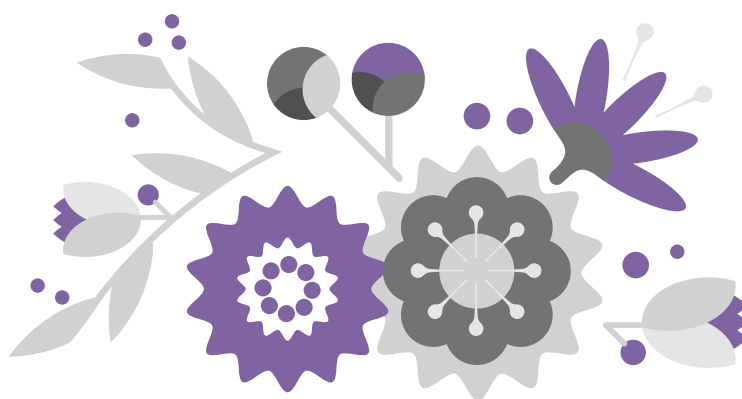
Beside his well-established research work, he is a very kind and enthusiastic persons. He always gave good opportunities to the foreign students. I would like to say "Thank You" to him as he always gave a kind opportunity to me and always supportive.

NYUGEN VAN DIEP Graduated March, 2018

Yamaguchi-sensei,

Ten years ago, I first met Prof Ryoji Yamaguchi in Vietnam with the impression of a handsome, kind and talented teacher. Subsequently, destiny gave me a good opportunity to study in Japan under your supervisor. You are a successful teacher that you have supervised and instructed smoothly many PhD students. For me, you totally supported me to carry out research ideas so I could study a lot from those work. You not only encouraged me in research life but also sympathized with me in my social life and did not put significant pressure on me. Sometime, I had really felt alone in my academy road but later I recognized the challenge is important for becoming a real researcher. I am proud to be your student and I am going to try to be a good product of your education. I want to thank you from my heart for making my PhD life in Miyazaki with you worth the while. As you retire from work soon, I wish you a happy life filled with fun and joy.

Your student, Nguyen Van Diep



Nguyễn T. Hương Giang

Dear Yamaguchi Sensei,

My first impression to you, Prof Yamaguchi, was the first time I left my home and went to Japan to study as a trainee in August 2008. At that time, I studied Japanese under Ebino. I used to be homesick, and learning Japanese was quite hard for me. One weekend morning, I was very surprised to receive a call from you, and you told me you were going to meet me at Ebino. You and your wife drove for more than 2 hours to visit me, with a lovely and sweet cream cake. That meeting was a big deal for me, and it was the first beautiful memory with you. Later on, I had the opportunity to return to Japan to study the doctoral course (2012-2016). I was lucky to be your student. All difficulties in work and life were being guided and helped, and you presented as my second father. You helped not only me but also many other Vietnamese students studying and working at Miyazaki. You assisted in completing the application documents, contacting to other supervisors, or even calling the embassies of Vietnam, Japan to guarantee for Vietnamese students during applying for a visa to come to Japan for the entrance examination and so on.

Currently, I have graduated several years, I have returned to my home country to continue my work as a lecturer at university. I am grateful for your kindness, your training, your advice that helped me be confident for knowledge and skills as a lecturer and scientist at a national university. I appreciate your guide, advice and assistance in all aspects of study life in Japan. It helped me inspire, creating good habits and always be positive energy for my students in Vietnam. In term of national relationship, you have contributed significantly to the development of Veterinary science in Vietnam. I know that you will be retired at Miyazaki University. It's very difficult for me to say all my sincere gratitude to you, wishing you good health and have lots of fun and happiness in life. Thank you very much, my teacher. You have always been a person I respect and appreciate all my life.

山口先生、定年退職おめでとうございます。

2008 年 8 月に研修生として日本に留学しました。最初、えびの市で日本語を勉強したのですが、日本語の勉強が大変でし、初めて家族を離れていたのも、とてもホームシックでした。ある週末の朝、先生から電話がかかってきてびっくりしました。その先生の優しい声が今も忘れられません。2 時間以上車でかかるにもかかわらず、私に会いに来ました。甘くて美味しいクリームケーキを頂きました。その記憶が覚えています。私にとって大きな励みでした。2012 年に、博士号を取得するために、宮崎大学に来ましたとき、幸運に先生の学生でした。研究の多くの困難がありましたが、いつも激励の言葉と情熱な指導のおかげで、無事に博士号が取得できました。留学生活の面では、日本語があまりわからない私に、可能な限りサポートされていました。心から感謝いたします。卒業後、母国に戻って研究を続けています。教員として先生のように教職に対する強い情熱と誇りを持って仕事をしています。今後は健康に留意されてお元気にお過ごし下さいますようお願いいたします。どうもありがとうございました。

アンジェリン・テー 平成 30 年卒

去年宮崎で開催されるはずの第 8 回日本獣医病理学専門家協会（JCVP）学術集会で先生とお会いできるのを楽しみにしていましたが、新型コロナウイルスによって中止となってしまいました。直接先生にお祝いの言葉を贈ることができなくて残念ですが、この場をお借りして先生にメッセージをお伝えします。

先生には、在学中にご指導いただいた上、卒業後もつい最近まで最後の論文の校閲や投稿のことについても大変お世話になりました。最後の最後まで心配をかけてしまい、時が経った今でもあの時のことを思い返すと、大変申し訳なく思う所存でございます。無事のご退官を心よりお慶び申し上げます。

先生との最初の出会いは、2008 年のマレーシアプトラ大学の獣医最終試験でした。当時、プトラ大学はマレーシアで唯一の獣医学部だったため、日本のように獣医国家試験はありませんでしたが、海外から毎年 2 名の試験官を招待していました。そして、山口先生は、わたしの卒業年の担当試験官の一人でした。当時、試験対策のため、先生が執筆したイヌジステンパーの論文を読みましたが、研究の内容は難し過ぎてまったく理解できませんでした。日本の大学、さすがですね…難しいこと研究をしていますね…というのが当時の印象でした。その後、無事に卒業することができ、臨床で働いていましたが、やはり病理のことをもう一度勉強したくて、山口先生に院生を募集していないか訪ねたところ、オッケーと返事をもらうことが出来ました。一回目の奨学金面接で落ちましたが、2 年目の 2013 年、無事合格し、わたしはやっと先生の学生の一人になることができました。

学生との距離が近い山口先生は、いつも気さくに話しかけてくれたのですぐに馴染むことができました。先生のわたしにとって、日本人に対するファーストインプレッションでした。研究のアイデアや奇抜な発想も何でも聞いてくれて、高額の抗体などの研究材料も買ってくれてわたしは本当に自由な研究環境に恵まれて、幸せでした。大学院卒業後一年間程研究員として働きましたが、先生はどれほど研究費の獲得のために苦労されたのかを身に染みて感じました。当時自分がどれだけ恵まれているか気づけなかったことに恥ずかしく思いました。山口先生、本当に感謝しております。

わたしには人生の節目節目で大きく影響を受けた人がいます。山口先生はその一人です。もしも先生と出会っていなければ、わたしはまったく違う人生を歩んでいたことでしょう。尊敬する山口先生の下で過ごした大学院時代は一生の宝です。この度、定年退職おめでとうございます。そして、長い間、お疲れ様でした。またいつかお会いできることを楽しみにしています。

Noordin Mustapha 2011

A true great friend

Agreeing to many that saying you'll be missed is erroneous, although many will truly reflect the barrenness working without your presence. Being a unique, optimistic and enthusiastic person who see others as colleagues had made your academician networking painless and fruitful. The honor and privilege to work with you briefly has always been joyfully impactful. So many brilliant and creative ideas have evolved and materialized during that tenure. Not to forget your role during that tenureship was at times more like a chaperone who tries your best to meet my dietary needs. A great, caring and wonderfully appreciated friend that is always continually be close to my heart. Probably, now is the time to exhibit how much fun and wonders can be churned during retirement. Keep well, stay energized and well.

Phudit Maneesaay Master student in 2011-2013

To Professor Yamaguchi. Thank you very much for your support. I lived and studied in Japan happily and peacefully because of you. Your attention, diligence and kindness touch my heart. Hope you always healthy and enjoy your retirement.

Habibi Wazir Ahmad

Dear Ryoji Yamaguchi Sensei!

A good teacher like you does not just shape our academic life, but shape the person we will become too. Thank you for helping me be a better person.

Hasheme Rahima

Dear Ryoji Yamaguchi Sensei!

Good luck to you as you move toward the next chapter life brings your way. This is my heartiest wish just for you. You have always guided me and showed me the right path to success. Thank you, dear Yamaguchi Sensei, you are the best.

Niazmand Mohammad Hakim

Respectful Ryoji Yamaguchi Sensei,

I am very blessed to have you as a Sensei. I appreciate your endless patience, motivation, and wisdom. I will never forget you! I am glad to mention everything you've done for your students. All that you have done, it was the best. Have a happy retirement. You deserved it!

Special Thanks, Hakim

Jamshid Noori

Dear Ryoji Yamaguchi Sensei!

I am very proud of having you as my Sense and supervisor at Pathology Lab. You had a very good and friendly relationship with foreign students of our Lab, always we were starting our morning seminars and discussion with your smile which was making us feeling good and energized in our studies. I never forget you and always pray for your good health in the future.

Best Regards

Sophie Nelissen February – May 2018

Anatomic Pathology Resident, Cornell University College of Veterinary Medicine

Sensei, you gave so many people from all horizons a chance to thrive in their career, and I don't think there are two places like your pathology laboratory in the world. Never will I forget the first day I stepped into this small room packed with desks, filled with books, microscopes and students of all ages and nationalities, each giving their very best to their own project.

For my part, I can never thank you enough for giving me the opportunity to spend even an ever so short time in the laboratory, and discover real hands-on pathology. Thanks to you, I found what I really wanted to do with my life, and left Miyazaki with a fresh mind and heart, and a sprinkle of naive bright hopes. I would never have dreamt to end up in a place as good as Cornell University, if it were not for those few months igniting a beginning passion. Japan will always have a very special place in my heart, and Miyazaki in particular will always echo with cherished and treasured memories. I sincerely hope you enjoy your retirement, even if I'm sure you will always find a way back to veterinary pathology!

全部英語で書いてごめんなさい。実は、日本語で最近あまり話さないで、日本語で詳しくに感謝の気持ちを伝えられないと思いました。短い時間でも、宮大に勉強していて本当に良かったです。あの時から、今まで、三年が過ぎてしまって、信じられません… 宮崎で過ごした日々を一つも忘れません。山口先生、いつも、お世話になっております。全部、ありがとうございました。



Jutapon Chayapong PhD graduate April 2017

It was 11 years ago since first time I knew Yamaguchi sensei. At that time, I was just a 6th grade veterinary student in Chulalongkorn University, Bangkok. Yamaguchi sensei was searching for assistant researcher and collaborator to work in his friend laboratory (in medical school). With Yamaguchi sensei supporting, I became an assistant researcher and later PhD student in medical school laboratory. Because I was a new face in Molecular and Pathology research field, Yamaguchi sensei always gave me precious advices in my profession. He was also my PhD co-supervisor. Moreover, he also played a role as a father who dissolved all of my life problems in Japan. Under his guidance, I was comfortable and success in studying. On my own behalf, I would like to express my uttermost gratitude to Yamaguchi sensei for according me the opportunities to pursue my career and PhD studies at Miyazaki University, from 2010 to 2017.

I wish you happily and healthy ever after. I am really appreciate and grateful to you for all of you kindness help.

OHNMAR MYINT October 2016 – September 2020

Firstly, I would like to express my very great appreciation to my supervisor Professor Ryoji Yamaguchi, Department of Veterinary Pathology, Graduate School of Medicine and Veterinary Medicine, University of Miyazaki, for his scholastic supervision, valuable guidance, continuous support, teaching and encouragement throughout my doctoral course. Sensei has taught and trained me not only for graduation research but also pathological skills. Moreover, he has taught and showed the way how to do to become good researcher and good teacher. When I arrived at Japan, Sensei helped me in everything such as living at dormitory, communicating with Japanese people, treating with Japanese food and visiting many beautiful places. I believe that I am very lucky under his supervision and I was rich to study in his lab due to his support. I will always remember for his kindness and supervision as a goldern memory in my life. Sensei is not only great scientist but also kind, patient and best teacher. He trains all of his student in pathology skill, research, good cooperation with other people and how to stay in happy life. When I become teacher, I will try my best and teach my students like our Sensei because Yamaguchi Sensei is our idol professor. Itsumo Arigatogozaimasu Sensei. In the future, may I invite Yamaguchi Sensei for visiting to Myanmar. I would like to meet again and learn more about the research from Sensei.

Apisit Pornthummawat October 2017 – September 2021

Congratulation on your retirement, your contributions to our department with the guidance you provided will be sorely missed. Retirement will surely offer you many new opportunities, which I know you will embrace wholeheartedly, just as you always do.

Mathurot Suwanruengsri October 2017 – September 2021

Dear Yamaguchi sensei. Thank you very much for all of your supports. Thank you for giving me the excellent opportunity in my life to studying in Miyazaki, Japan. I am a very lucky student because I am your student, who is also my teachers' teacher at Chulalongkorn University, Thailand. You taught me everything in Pathology, research, and Japanese culture. Sensei always support us. You never leave us alone. Even though I am a beginner in the pathology field, I will continuously try and do my best. I wish you happiness,
healthy all the times. Sincerely yours, Mathurot Suwanruengsri

Niazi Ahmad Massoud

Dear Ryoji Yamaguchi Sensei!

I must tell that I am lucky to studied under your mentorship in veterinary pathology lab. I really appreciate your suggestions and comments regarding our presentations and case studies. As it said that retirement is when you stop living at work and start working at living. So, congratulations and enjoy your well-earned retirement.

Phawut Nueangphuet October 2018 – September 2022

I feel very grateful to have you as my supervisor and to have an opportunity to improve my pathological skills at this university. You are more than just a professor; you are my inspiration. I appreciated that you took the time to guide me from basic knowledge when training me, and you are so patient with me. Assigning multitasking works to me that were sometimes quite hard allowed me to have the chance to research and get more confidence in my abilities. The valuable skills I've learned from you over the past year have given me the work experience in this career for the future. I appreciate everything and will keep extraordinary moments in mind warmly. All my success, knowledge, and improvement, I owe to you. Thank you so much.

Suzanne Dewulf. September 2019 – February 2020

Dear yamaguchi sensei, I was very happy to meet you. I wish you a beautiful and happy retirement, and I wish you the best. Thoughts from Belgium.

周子恒 September 2019

ご退官おめでとうございます。

いつもセミナーおよび生検のディスカッション時にご指導を賜り、深く感謝しております。いつも山口先生のコメントから自分の不足を認識し、問題の新しい考え方をいただきました。これからの一年間もよろしく願いいたします。





2021







2020



2019











2018











2017





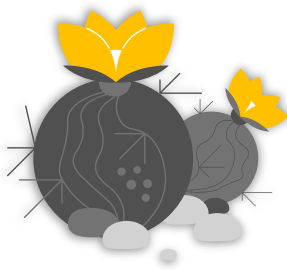
2016

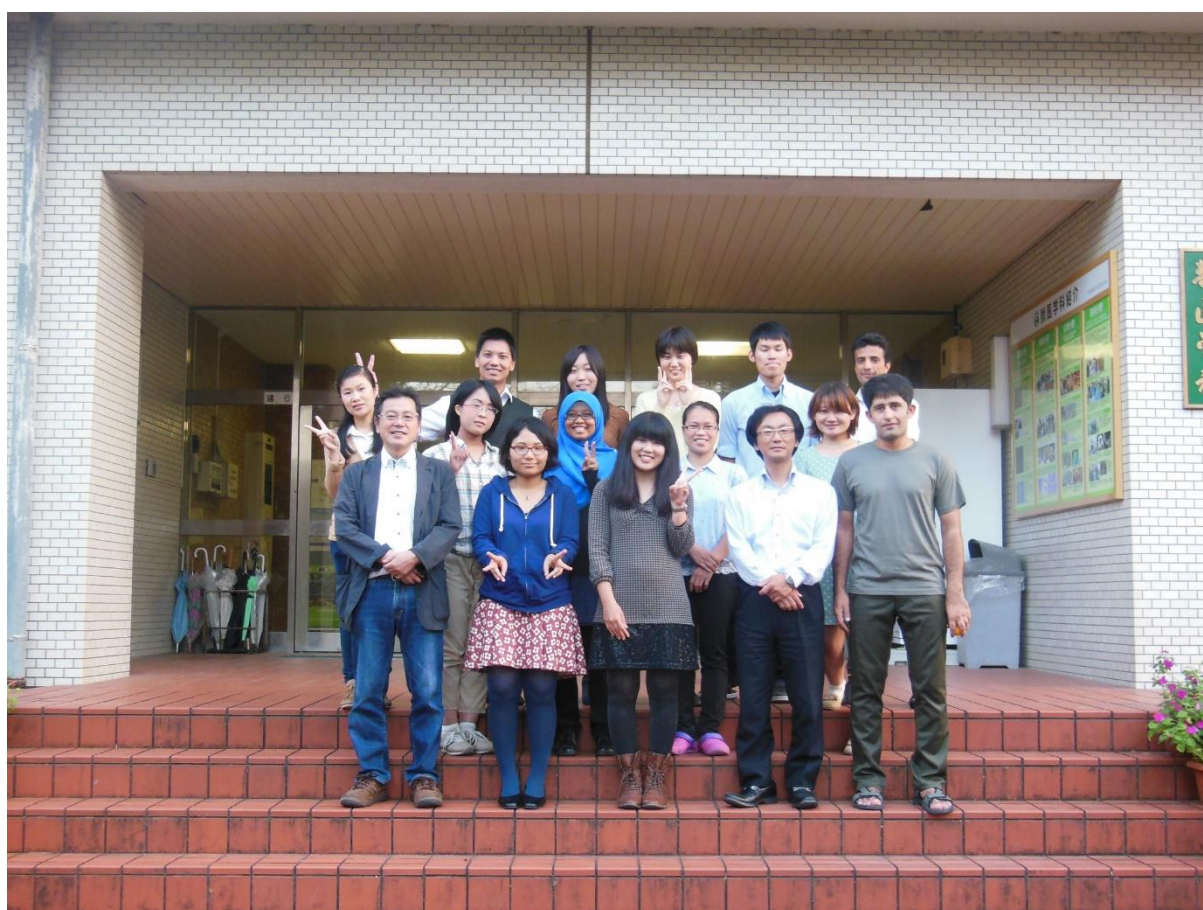




2015







2014



2013

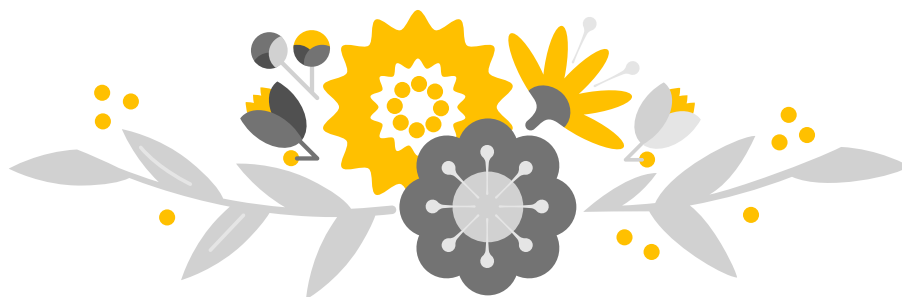








これまでのベトナムへのハノイ農業大学を通しての貢献について政府から功労賞をいただきました。学生が優秀で、学長先生の配慮で、皆さんたちのおかげで立派な賞をもらい、感謝しております。素直に皆さんの気持ちがうれしいです。よく見るとバックの赤壁に私の名前が記載されています。





2012





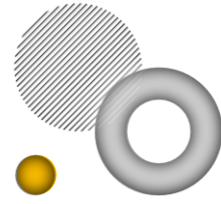
2009



2006



編集後記



山口先生がご退職されてから早いもので一年が過ぎようとしています。

「山口教授退職記念誌」も、ようやく完成の運びとなりました。当初の発行予定を超過しましたこと、何卒ご容赦下さい。

ご縁があり、山口先生とお仕事をさせて頂いてまず驚いたのは、交渉力が優れているという点です。とにかく押しが利く先生で、大型備品などの交渉を得意とされていました。最初に私が業者と事前交渉するのですが、最終的には大幅に値引きされており、一体どのように価格交渉をされたのだろうと驚くことが度々でした。即断・即決でスピードがあり、話し好きで口が立ちます。業者との交渉自体を楽しんでおられるようでした。おそらく海外学術雑誌編集者・査読者への対応や研究寄付金の獲得などでも、先生の長所がいかに発揮されたと思われます。論文が面白いように受理され、多くの学生がその恩恵を受けました。

本研究室の特徴といえば、留学生の多いことです。国際学術交流活動は、外交的で行動力のある先生向きの仕事であり、特にベトナムの人材育成に大きく貢献されました。コロナ前は海外出張も度々で、とても楽しみにされていたようです。研究室にはベトナム、タイ、マレーシア、ミャンマー、アフガニスタンなどから多くの留学生を受入れ、研究室は常に活気に満ちていました。一時期、日本人より留学生の方が多く、日本人学生から「学生部屋が狭すぎるので何とかして下さい」と言われたものでした。学生の自主性を重んじる教育指導方針で、教えずるのは良くないと教えられました。学生を泳がすのも上手で、文化や習慣の違う多くの留学生を指導できたのは、ひとえに先生の懐の深さだったと思います。

山口先生は感染症と病理の両方ができる先生で、私が着任した 2007 年頃には犬ジステンパーを研究課題にされ、形態病理学というよりはウイルス株やウイルスレセプターなどウイルス寄りの研究内容でした。2013 年頃から次第に研究スタイルを形態病理学にシフトチェンジされ、野外例を中心とした研究報告が多くなっていきました。病理診断する際、通常は臨床事項を読んでから標本を観察しますが、山口先生はまず標本を先にみて、先入観なしに本質を捉えることを大事にされていました。優秀な学生および大学院生にも恵まれ、50 代後半からは円熟味を増した充実期だったと思われます。

今回、「山口先生の業績の記録」としての本誌の役割を押さえながら、山口病理学の背景にあるものを何らかの形で残せればと願いながら編集に携わらせていただきました。この記念誌が後日読み返してみても心に残るものになれば幸いです。お忙しい中、ご寄稿くださった皆様、そして編集にご協力頂きました学生諸氏に厚くお礼申し上げます。最後となりましたが、本編集を任せて頂きました山口先生に心より感謝申し上げます。

2022 年 4 月 吉日

平井 卓哉

(編集代表者)

